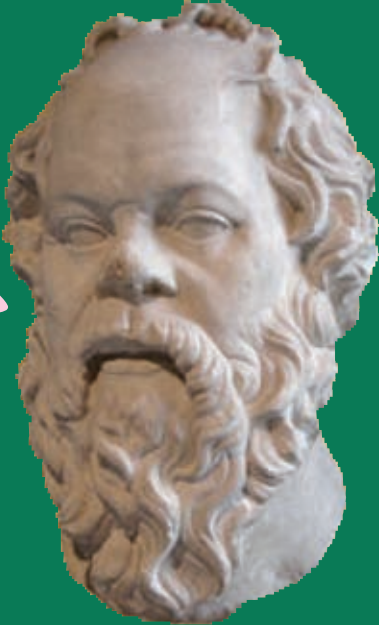


特集：平成20年度第2回FD研究会報告
英語教育の現状—高等学校と大学—

ディアロゴス



ギリシャ語のΔΙΑΛΟΓΟΣは「対話」という意味です。英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など、西洋近代諸語も、それを音写して取り入れています。「対話」は「真理への道」として、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの哲学の方法とされ、その弟子プラトンの著作の形式「対話編」となって有名となった言葉です。現代はその「真理への道」としての対話ばかりか、一般用法としての「相互理解の道」としての対話まで弱くなり、もっとも強く復活が望まれるものと言えます。

第15号

目次

学長挨拶				1
実施要項				2
日程等及びタイムスケジュール				3
【趣旨説明】				
教養教育推進センター 副センター長	中川	一雄		4
【基調講演】				
『高等学校の英語教育』				
岐阜北高等学校	遠藤	裕一	教諭	5
『高等学校の英語教育』				
華陽フロンティア高等学校	原	雅幸	教諭	17
『岐阜大学の英語教育－事例紹介－』				
教育学部英語教育講座	巽	徹	准教授	36
教養教育推進センター 副センター長挨拶				44
教養教育推進センター長挨拶				45
アンケート集計結果				46

学長挨拶

岐阜大学学長 森 秀樹

お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、FD研究会で英語教育について勉強しようということでございます。本学は、学生憲章として国際語である英語をマスターしようと呼びかけているところであり、そのための英語教育を行うという方針を立てています。また、企業サイドからも英語力を身に付けた学生を望む声が多く聞こえており、各大学が英語教育に力を入れているところでございます。私の世代は、高等学校の入試でも英語は選択科目でした。しかし、高等学校入学後、やはり英語は大事だということで一生懸命勉強した記憶があります。

現在、本学は第2期中期計画に向けて、目指すべき方向性を定め、どういったように臨むかということディスカッションしているところです。その中でも英語教育をどのように実質化しようかと考えているところです。教養教育を全学体制によって行うこととなっておりますが、英語教育にかける時間が以前に比べ減っているのではないかというご指摘や学生の語学力が学年進行に伴って必ずしも伸びていないというデータもございます。このような状況の中で、英語教育の現状を高一大連携の視点から勉強することは、大変有意義なものと考えます。

今日は、高等学校の英語教育の立場から、遠藤先生と原先生にご講演をいただいて、高等学校の現状を認識するとともに、巽先生には本学の英語教育の事例を紹介していただきます。そして、双方の実情を踏まえた具体的で有効なディスカッションが行われることを期待いたします。講師の先生方に感謝申し上げるとともに、ご参加いただきました先生方にとっても良い勉強会になればと願うところでございます。

ごく簡単ではありますが、開会の挨拶とさせていただきます。



平成 20 年度

第 2 回岐阜大学教養教育推進センター F D 研究会

実施要項

1. テー マ : 『英語教育の現状－高等学校と大学－』
2. 目 的 : 近年、文部科学省の「ゆとり教育」によって基礎的な構文力や語彙力に不足が見られる学生が増加しているように思われる。
平成 18 年度以降、教養教育推進センターも初年次英語教育の柱として「語彙力・構文力を伸長させる」ことを目的としてきたが、ここでもう一度大学入学前の中等教育の現状をしっかりと踏まえておきたい。
そして、これを機会に今後の岐阜大学における英語教育の改善・改革を展望してみたい。
また、全学共通教育の既修外国語教育について、より一層の充実を図るための一助とすることを目的とする。
3. 日 時 : 平成 20 年 12 月 3 日 (水) 13 時 00 分～ 15 時 30 分
4. 会 場 : 全学共通教育講義棟 1 階・105 教室
5. 主 催 : 岐阜大学教養教育推進センター
共 催 : 教育学部、地域科学部
6. 受講対象者 : 本学教職員

◆プログラム

【趣旨説明】 岐阜大学教養教育推進センター

副センター長 中 川 一 雄

【講 演】

『高等学校の英語教育』

岐阜北高等学校

遠 藤 裕 一 教諭

※質 疑 応 答

華陽フロンティア高等学校

原 雅 幸 教諭

※質 疑 応 答

『岐阜大学の英語教育－事例紹介－』

教育学部英語教育講座

巽 徹 准教授

※全 体 討 論

平成 20 年度

第 2 回岐阜大学教養教育推進センター F D 研究会

日程等及びタイムスケジュール

- ・日 時 平成 20 年 12 月 3 日 (水) 13 時 00 分～ 15 時 30 分
- ・会 場 全学共通教育講義棟 1 階・105 教室
- ・主 催 岐阜大学教養教育推進センター
- 共 催 教育学部、地域科学部

○司会・進行：中川 副センター長

13:00	開 会 学 長 挨拶	
13:10	【趣旨説明】 岐阜大学教養教育推進センター 副センター長 中 川 一 雄	
13:20	【講 演】 『高等学校の英語教育』 岐阜北高等学校	遠 藤 裕 一 教諭
13:50	※ 質 疑 応 答	
14:00	【講 演】 『高等学校の英語教育』 華陽フロンティア高等学校	原 雅 幸 教諭
14:30	※ 質 疑 応 答	
14:40	【講 演】 『岐阜大学の英語教育－事例紹介－』 教育学部英語教育講座	巽 徹 准教授
15:10	※ 全 体 討 論	
15:20	教養教育推進センター 古田センター長 (教学・附属学校担当理事) 挨拶	
15:30	閉 会	

はじめに—今回のFD研究会の趣旨

岐阜大学教養教育推進センター
副センター長 中川 一雄

今年度2回目のFD研究会として、前回の人文学・社会科学系のFDを踏まえ、「英語教育—高等学校と大学の授業の実状」を講演してもらいます。高等学校からの講師（一人は進学校の英語教師、もう一人は実業系の高校で教鞭を執られていた教師）お二人と、中学での英語教育の経験もあり現在教育学部の英語教育講座に所属している教員お一人の、三人の先生方からお話を伺います。

「なぜ今実状報告なのか、岐阜大学の英語教育に関して『グランド・プラン』を描く努力をすべきではないのか」という疑問を持つ方もおられることでしょう。しかし、昨年のFD合宿を記憶なさっていることと思います。そこでは英語教育に関してさまざまな視点からさまざまな意見が各部局から出されました。またその時は、おもに、教育を担う組織面での議論が俎上に上りました。担当面（授業負担）についての視点や意見の相違が、全体としての総括に至らなかったことも覚えておられると思います。

昨年以降、例えば地域科学部は教養教育に関するいわゆる「責任学部構想」も提案し、その構想には英語教育への提言も含まれていました。全体としては、地域科学部を教養に関する諸事の「接着剤」的役割を果たす基軸部局として、全学協力体制の下に教養教育を改善・充実していこうという提案でした。英語教育に関しては、教養と専門を有機的につなぐ方向性を堅持し、教養段階での基盤的英語力（語彙力・構文力の伸長）と学部・学科の特性に応じてカリキュラム上必要となる英語力の涵養、という路線でした。

さらにこの間、年初に中教審の高等教育に対する将来像の答申も出されました。英語教育に関して端的に言えば、各学部の学士課程カリキュラムの一貫性の中に英語教育も位置付けよ、という提案でした。会話能力ばかりでなく、読み・書きも重視した4技能バランス型の英語教育も提案されていました。また学外試験を活用するにしても、それを学部のカリキュラムのなかに位置付けよ、とも示されました。これまでの教養における英語教育の在り方は、全体としてこの答申と矛盾するものではなかったと言えるかと思えます。

また、つい最近役員サイドからは、岐阜大学全体の英語教育に専念する組織や人員の配置（国際教育推進センターの英語教育部門）、教育面ではTOEICなどを活用した習熟度別クラス設定と目標スコア設定とその（学生・教員双方の）達成度評価、などを基本としたプランが中期計画の重要事項として提案されました。岐阜大学という教育・研究機関にとって、この組織形態がよいのか悪いのか、教育内容の軸が数値化されることの是非、などこのプラン自体は、今後教養推進センターも含めた学部等で十分な吟味・検討がなされていくべきであり、そのはずです。

さて、このような状況の中での学士課程における英語教育の「グランド・プラン」づくりです。その作業には、今後具体的に検討されていく「新・中期計画」に活かされる、かつ着実に議論を積み上げていくという姿勢が必要だと思われます。教育・研究機関が一度道を踏み外せば、その修正には二倍も三倍もの時間と労力が必要となるからです。今日は、プランづくり、具体的検討の先ず一步として、岐阜大学に来る学生たちが高校時代どのような英語学習を積んでいるのか、また推薦入試を受験するような高校生の学習はどうなっているのか、さらには、入学後どのような英語学習を行っているのか、等々事例・実状の一端をよく知っていただき、今後の必要な検討作業に繋げていければと願っています。

高等学校の英語教育

岐阜県立岐阜北高等学校
教諭 遠藤 裕一

本題に入る前に自己紹介をさせていただこうと思うのですが、私、遠藤と申しますけれども、岐阜北高校でお世話になって5年目で、今45歳になります。きょうこの場に立たせていただくに当たって、無作為に選出されたわけではなくて、私と岐阜大学のかかわりをちょっとお話しさせていただきたいのですが、ちょうど今いろんな研修があるのですが、高校の教員の研修ということで14条研修というのがありまして、岐阜大学の方に派遣していただいて2年間修士の資格を取るために勉強させていただくという研修があるのですが、ちょうど平成11年から12年にかけて2年間こちらの方でお世話になりました。そのときにお世話になった先生は、実はそこにいらっしゃる伊藤先生なのですけれども、大変できの悪い生徒でして、年も行っておりましたので、修士論文を書くときに、かなり苦勞をかけた思い出があります。きょうもこのキャンパスに入ってきて、非常に懐かしいなという感じで、今そんな気持ちで話をしているのですが、そのときのご縁できょうお話をさせていただくということです。つたない話ですが、よろしくお願ひします。

それでは、資料の方をお開きください。資料に指導案が少し出ております。この指導案は、実は学校の方に支援化訪問というのがありまして、県の教育委員会の方から偉い先生方が来て、その代表で授業をだれかやらなくちゃいけないのです。そのときも実はくじ運が悪いものから、おまえやれということで当たってしまいまして、10月の末に研究授業をさせていただいたときのものなのですけれども、まずきょうはその授業のさわりということで、その授業の最初に行ったアイスメイキング的な部分をちょっと紹介させていただこうかなと思います。

ここの単元は「ランドマイン」という単元で、「ランドマイン」という名前は地雷のことなのですけれども、要は地球上に1億2,000万個の地雷が今埋まっています。有名なところで言うと、イギリスのダイアナ妃とか、あと坂本龍一さんというミュージシャンがいるのですが、ちょうどこの間亡くなった筑紫哲也さんの番組の関係で地雷撤去のことが出てきまして、大体はこのテーマはそれなのです。

一番初めにここに写っていますのが、坂本龍一さんの出したCDのジャケットなのですけれども、まず生徒たちに最初にこのスライドを見せたのです。何にも言わないでとにかく見てみようということで、スライドをどんどん映していきます。地雷がたくさん並んでおります。今度これの一つ一つを見せていこうということで、このような感じで何も言わずに見せていって、これは地雷なのだよという話で、見てどんな印象を持ったと確認したのです。その中でいろんな意見が出てきたのですけれども、まずきれいという印象が出てきました。きれいだという、かわいらしい、あと爆弾に見えないとか、芸術品みたいな話が出てきて、この印象が出た段階でちょっとしめしめという感じなのですけれども、これは地雷なのだよという話で、地雷に関する発問をいろいろしていくのです。例えば、地雷の殺傷能力ってどんなものか知っているみたいなことで、生徒は大体「即死」とかよく言うのですけれども、地雷というのは、人を死なせないようにできているのだよと。何でだと思おうというのを問いかけていくのです。そうするといろんな意見が出てくるのですけれども、地雷で1人が即死すれば、現場から兵士が1人いなくなるだけなのだけれど、足を吹っ飛ばすことによって、それを介護する兵士がやっぱり戦場からいなくなるのだよという話とか、ゆっくり苦しめるのだよという話をまずしていきます。それから二つ目にしたのは、地雷というのとどのぐらいの重さで爆発すると思うと。そうす

ると、10キロとか、人間の体重だから四、五十キロとかという話が出てくるのですが、大体これは数百グラムで爆発するのです。ということは、教科書を1冊ぽんと置いただけで吹っ飛ぶのだよという話をすると、生徒がびっくりするのです。教科書1冊で爆発するということは、ウサギが踏んでも爆発するし、象が踏んでも爆発するし、68キロの僕が踏んでも爆発するし、とにかくどんなものが踏んでも爆発するのだよということで、地雷の無差別性みたいな話をします。それから最後、1億2,000万個も埋まっているのだよという話をして、授業を」始めるときの最初に、こういうようなことでまず地雷の紹介をしてから、言語活動に入っていました。言語活動もいろいろやっているのですけれども、ここで1枚資料をめくってください。

右側に英語が載っていて、左側に日本語が載っているこういうプリントを2人組にして生徒に配りまして、左側の日本語は、いわゆるセンスグループごとに、意味の固まりごとに日本語が並べてあるのです。この作業は、同時通訳者の方のトレーニングに取り入れているというような話で、Aさんはプリントを見ている。Bさんはプリントを伏せて置いておくのです。Aさんが「地雷」と言うのですよ。そうするとBさんは、地雷という日本語を英語にスイッチしていきます。「Landmines」と。「1億2,000万もの恐ろしい武器があるかもしれない」と言われて「There may be as many as 120million of these terrible weapons」というふうに交互にやるのです。かなり読み込んだ教材ですので、ある程度は出てくるのですけれども、生徒が詰まったときには、プリント持っている人の助けを得ながら最後までやっていく。こんな活動もまず入れてみました。

こんなような活動をしながら50分の授業を組み立てていくのですけれども、先に申し上げたように、これは偉い先生方の前でやった授業ですので、じゃあどの程度普通の授業と違う授業かということなのですが、全く普段やっていない架空のというか、よそ行きの授業をなさる先生も見えますし、開き直ってそのままの授業をやられる方もいるのですけれども、僕のつくった授業は、普通の授業が100としたら130ぐらい、30%ぐらいがちょっと普段やっていないことで、普段やりたいということ、残りは大体普段やっていることで授業を組み立てたわけなのですけれども、やっぱり普段はこういうような楽しい授業はなかなかできません。まず、じゃあどうしてこんなような授業をしたのかという話で、「中学校・高等学校の英語教育の現状と課題」というのがあるのですけれども、この資料は、中央教育審議会を中心とした今の日本の英語教育の中で、今、新指導要領もまた出ようとしているのですけれども、その中で出てきていた資料で、中学校と高校の授業の問題点と改善点を抜粋した資料なのです。高等学校のところでは白丸のところ、概要や要点を適切に把握するなど、読むことについては比較的良好だとあります。これは裏を返せば、いわゆるトラディショナルな、訳読中心だということなのです。その黒丸のところは欠点なのですけれども、文法・訳読が相変わらず中心であるというご批判、それから4技能の指導において偏りがあるということで、読み、書き、聞き、話すという4技能の中で、やっぱり読み、書き中心の授業になってしまっているということですね。それはずうっとご批判にさらされているということで、高校の先生方があまり対応し切れていないということだと思います。それで改善点としては、これから国際化の時代なので、自分で英語を発信していける人材の育成ということになってくると、4技能をバランスよく育成するのだという2点が上げられていまして、この2点が新指導要領の中にも盛り込まれています。いろんな偉い先生方が論文を出しているのですけれども、「すぐれた英語授業実践・よりよい授業づくりのために」という大修館書店の中の、ある先生のご批判なのですけれども、ちょっと読んでみますね。

「教師が延々と日本語で訳や文法の解説をし、生徒は指名されたときに指定された英文を読んで日本語に訳すだけ。こういった「伝統的(?)」な高校の授業を今なお見ることがある。ひどい場合には、一斉音読練習すらなく、英語の授業で教師も生徒もほとんど英語を使うこと

がない。このような授業ではオーラルコミュニケーション能力はもとより、英語を読む力も書く力もつくはずがない。「授業」と呼べるかも疑問であると。

非常に辛らつな意見で、ああ、僕の授業は「授業」じゃないのだと思って、この論文を読んだときにかなり自分としては意気消沈したのですけれども、こういうきつご批判もあるということなのです。こういった流れの中で、先ほど僕がやったような授業、言語活動がたくさんあって、生徒が生きている授業ということがかなり中教審の方からも言われていますし、県の偉い先生方からも、こういう授業をした方がいいよというご指導は強くあります。

以上がとりあえず、ある意味今の英語教育の理想論みたいな形なのですけれども、次をめくってください。

では、現実はどうなのかという話で、少し岐阜北高校の話を見せていただきたいのですけれども、進学状況ということで、平成20年度の大学入試結果が載っております。本校に入ってくる生徒のほとんどが、名古屋大学、岐阜大学を希望してしまして、名古屋大学は36名合格しましたし、実はこちらの方、岐阜大学の方にも53名の生徒がお世話になっています。私は実は去年、3年生の担任をしておりまして、今の1年生の生徒の中に教育学部でもかなりお世話になっていますし、地域科学の方とか法学部の方でも本当にお世話になっています。ありがとうございます。

ということで、私としては岐阜北高校に入ってくる生徒は、岐阜大学とか名古屋大学を希望しているのだから、できるだけ生徒の希望を叶えてあげたい、つまり岐阜大学の合格者をもっと伸ばしたいというようなことを僕は思っているのですが、学校の校長先生、教頭先生の方は、最近どういことを言っておられるかということ、とにかく最近いろいろ成果主義というか、高校の方もいろいろ外部からのご批判やら要望も多くて、実は岐阜大学・名古屋大学も勿論合格させるように頑張るのだけど、もっと高い大学を受からせろというようなことをかなりがんが言われるのですね、上から。要は、端的に言うと、東京大学や京都大学の合格者を出せと言うのですね。とにかく出せるようにしなさいと。かなりきつく言われます。進学に熱心な先生はいるのですね。お好きな先生もかなりいて、東京大学・京都大学の合格者と言うだけで、何か「サンデー毎日」を引っ張り出してきて、すごうれしそうに話す先生もみえるのです。そうかと思うと、進学よりも部活とか、「何か」やった方がいいじゃないかと、いろんな先生が存在しているのですけれども、僕はちょうど真ん中辺で、とにかく岐阜大学・名古屋大学にたくさん受からせてあげたいなあと思っているのですが、数値目標を立ててくるのですね。数値目標、この間校長先生から、5、50、250と言われるのですね。これは、東京大学5、名古屋大学50、国公立250受からせろと言われるのですよ。正直かなりハードルが高いです。「まいりましたね、難しいですね」と、この間校長先生に話しをしました。「数値目標というのは本当に意味があるのですか」とちょっと言ったら、かなり怒られまして、「そんなことを言っているから駄目なのだ、お前は」みたいな感じなのですよ。まっています、正直言って。

これは進路指導の先生から借りてきた資料で、2年生から3年生までのキャリアガイダンスということで、保護者の方々に配った資料なのですけれども、きょうは2年生の部分だけをちょっと抜粋をしてきました。階段状のこういうグラフがあるのですけれども、見ていただきたいのは、テストの数の多さなのです。階段のところにもいろんなテストが書いてあります。6月、第1回実力テスト、7月、第1回校外実力テスト、それから8月の終わり、第2回校内実力テスト、10月、第2回校外実力テスト、11月、第3回校外実力テストと年を明けてもテストばかりですね。要は、テストばかりやっているのですよ。テスト、テスト、テスト、テストで、しかも私は英語じゃないですか。必ずあるのです。テスト作成、テスト、監督、採点、終わったと思ったらまたテストで、その繰り返しをしております、本当に。テスト、テスト、テストで、生徒も大変なのですけど、僕らも大変で、その間に宿題テストが入っているのですね。生徒はとにかくテストばかりしておるのですよ。ALTの先生なんかは本当にびっくりさ

れるのですが、こんなにやっているのかというぐらいです。

それからさっきの東京大学・京都大学へ入れなさいという話の中で、実はこの丸が並んでいる最後のところに、難関大学見学会というがありまして、これは昨年度から始まったのですが、「東大を中心に見学し意欲の向上を図ります」と書いてあるのですが、僕は「東大ツアー」と呼んでいるのですが、東大オープンキャンパスに合わせてツアーを組むんですね。東京へ連れて行って、東大のキャンパスを見せて、「どうだ、東大というのはこんなすごいんだぞ！」というようなことを言って帰っていく。どこかであったのですよ。「ドラゴン桜」というドラマとか漫画で、実は偏差値30位の生徒を東京大学に入れるという漫画があるのですが、その中で同じことをやっているのですよ。本当なのかなあということを思い出しながら、でも進路の先生とかが一生懸命やっていて、うちの生徒は結構純粋なもので、行ってどうだったと言ったら、「すごかった」とか「東大に入りたい」とか言う子が中にはいるのですよね。下手したら来年ぐらいに引率しなきゃいけないのかなあ、まいったなあと思っているのですが、こんなようなことまでやっております。

それから、もう1枚めくってください。

授業の中身も、先程の大学の教授の先生のご批判じゃないのですけれども、偏差値を伸ばしなさい、大学の数を出しなさいと言われる以上、教養的な英語ばかりやっていると、正直、伸びないのです。勢い、予備校、私、河合塾の出身なのですが、予備校でやっていた授業を思い出しながら、ここは出るよとか、このポイントを押さえなさいみたいなこともやっています。

その中で今日は何をご紹介しようかと思って迷ったのですが、その中でも一番地道で、ちまちました指導というのですか、単語テストの話をしたかと思っているのですけれども、今、僕の子供がちょうど中1なのですけれども、単語は調べなくていいようにできているのですね。教科書の後ろの、INDEXのところから単語が全部載っておいて、その単語も本当に基本的なものばかりなのです。そういう生徒も入ってくるのかということでもちょっと納得したのですけれども、単語テストをやります。下に速読英単語テストという枠があるので、要は僕が何か発音をします。例えば、Faculty development と言うのです。そうしたら生徒はFaculty development と書いて、Faculty ってわからないから、発達とかと書くのですけれども、そういったテストをするのですが、ただやるだけでは生徒はついてきませんので、合格点があります。合格点は14点合格です。つまり、7割合格にしてあるのですけれども、ここに、その上に何か1とゼロの数字が打ち込んである表があるので、毎回単語テストをやると、僕がコンピュータに打ち込むのです。14点以上の生徒には1を打ち込む。不合格の生徒は空欄しておきます。その後、追試に来てくれた生徒にはゼロを打ちます。そうするとこんなような表ができ上がるのですけれども、例えば出席番号3番、9組の3番の子がおるのですけれども、その生徒はすごいですね、オール1です。オール1ということは、全問合格です。こういう生徒もいます。それから11番の子、ゼロと1があるので、全部数字が入っていますので、落ちてでも必ず頑張って合格してきます。まあ努力賞という感じですね。こういう生徒もいるのですが、15番の生徒を見てください。ほとんど無視ですね。受からないし、来ないし、こういう生徒は認承点悪いのです。要はこれだけこちらが必死にやってもついてこない生徒は、岐阜北にもいっぱいいるのです。こういう非常にミクロ的なのか、流動的なのか、こんなことまでしなくてはいけないのかということをおもっています。私が高校の時は、単語テストがありました、やりっ放しでしたし、時々先生が「30回書いてこい」とか何か言うのもあったのですが、ほとんど意味のない感じだったので、「馬鹿馬鹿しいなあ」と思っていました、結構、私も馬鹿馬鹿しいことでもやらざるを得ないのです。こんなようなことを繰り返しています。

話を戻すのですが、要するに先程、こっち側に今の日本の文部科学省の推進する英語教育というのが片手にあって、こっちに進学実績を上げようというベクトルがあって、その間

に僕はこのように入り、間に引っ張られて引き裂かれそうなのですが、非常に今の現場というのはそういった中で、僕みたいに純粋に英語が好きで、実はこちらでお世話になっているときも英語教育について書いたのですけれども、英語教育には何の役にも立たないようなことを読んでいる方が僕は楽しいので、困ったなあと思っています。

それで実は、話をしますけれども、この間のノーベル賞の受賞の話で、名古屋大学の方で益川先生という方と小林先生という方がノーベル賞を取られたときに、ちょっと益川先生がこんな話をしておられ、和歌山県の柿栽培農家で柿の収穫を増やすために蜂をたくさん放したという話がありまして、つまり受粉しやすくなって、最初の二、三年は柿の収穫量が凄く増えたのですけど、結局、柿の体力が落ちてしまって、最終的には収穫量が落ちたという話をしてみえたのです。それを引き取って小林先生が、要するに今世の中で成果主義とか応用主義というふうに偏り過ぎていて、目に見えるような刺激だけを求めているので、「私達のような学問が将来生き残っているかどうか心配だ」みたいな話です。私、すごく共感して、柿の収穫量が東京大学の合格者で、ハチがテストで、柿が生徒だとしたら、これはもう壊滅的だなあと思って、実際にテスト、テスト、テストとやっていくものですから、英語嫌いが凄く増えるのです。偏差値は伸びるのですけど、英語が嫌いな生徒とか、もっと言うと、私のことも嫌いになっていくのです。ですから結構嫌われているのですけど、本当にこれでいいのかなと思っています。じゃあ私はこうやって引っ張られてどういう事がしたいのかということなのですが、やっぱり英語って基本的に楽しいよとか、外国に行って英語のことを誇ったりとか、自分で発信したり、やりとりができたときにうれしいじゃないですか。そういうようなことだけ教えて、あとはもちろん基本的な語彙とか構文とかあるので、そこだけ押さえないのですけど、そこから先は、例えば岐阜大学に入ってくるような生徒たちだったら、英語が好きならやっていくであろうという、そういう結構感覚があります。せっかく偏差値が伸びたかもしれないけど、英語嫌いの状態で大学に送り込んだとしたら、大学の教養部の英語は多分しんどいだろうなあと思っているので、何とか英語嫌いを増やさずに、目先の偏差値は伸びないかもしれないのだけど、英語好きな生徒を増やしていきたいなあと考えているのですけど、そういうようなことを考えながらやっております。(拍手)

指 導 案

- 1 日時 平成20年10月21日(火)
- 2 学級 2年5組
- 3 教科書 CROWN English Series [II] (三省堂)
- 4 単元 Lesson 8 Zero Landmines
- 5 本時の目標
- ① 対人地雷について理解を深め、本単元に関する興味・関心を深める。
 - ② フレーズリーディングを利用した活動を行い、日本語から英語への転換を素早く行えるようにする。
 - ③ 坂本龍一氏の『ゼロ・ランドマイน์』のCDを紹介し、自分たちにもできることがあることを認識させる。
- 6 指導上の工夫
視聴覚機器を用いたり、ペアワークを行うことにより、授業が単調になることなく、生徒の意欲・関心が高まるように工夫した。
- 7 教具 CDデッキ、コンピュータ、プロジェクター、ワークシート

8 学習指導の展開(細案)

過程	指導内容 (教員の動き)	生徒の活動 *評価基準・評価方法	指導上の留意点
導入 1 5 分	① 対人地雷の写真を投影し、生徒に見せる。 ② 写真の印象や地雷に対して知っていることを問う。 ③ 対人地雷についての解説を加える。	対人地雷についての印象をメモしながら、写真を見る。 自分の印象や地雷についての知識をノートにまとめ、発言する。 *積極的な態度で授業に参加しているか。	見た目の印象(綺麗・かわいいなど)と『悪魔の兵器』と呼ばれる危険性のギャップを際立たせる。 本単元に対する興味・関心を高めるように心がける。
展開 ① 5 分	① モデル・リーディング ② コーラス・リーディング	センスグループ毎にスラッシュを入れる。 教員の後について、英文を読む。 *大きな声で読んでいるか。	生徒の集中力が途切れないように、強弱や間を強調してモデル・リーディングを行う。

<p>展開 ② 1 5 分</p>	<p>① 英文和訳をさせる。 ② 内容に関する発問をする。必要があれば、文法事項や構文に対する解説を加える。 ③ ペア・リーディング</p>	<p>英文を読んで、日本語に和訳する。 教員の発問に対して発言する。 * 熟語や構文等を正しく把握して、英文を訳しているか。 コンマ・ピリオド等毎に交替しながら英文を読む。</p>	<p>他の生徒が聞き取れるような声で発言させる。なるべく教科書だけを見て日本語に直すように指導する。</p>
<p>まとめ ① 1 0 分</p>	<p>① センスグループ毎に、日本語から英文への転換を素早く行わせる。(ペアワーク・ワークシート使用) ② プレゼンテーション</p>	<p>① 1人が日本語を読む。 ② もう1人は、それに対応する英語を言う。 * 積極的な態度で、活動に参加しているか。</p>	<p>センスグループ毎に英文を捉えることにより、英文が速く理解できることを伝えたい。 英文がスムーズに出なかった時は、すぐにその英文を言うことにより、テンポ良くできるように指導する。</p>
<p>まとめ ② 5 分</p>	<p>① 坂本龍一氏の『ゼロ・ランドマイン』のCDを聞かせる。 ② 対人地雷についての感想を書かせる。</p>	<p>① 歌詞の意味を味わいながら、曲を聴く。 ② 思ったことを率直に表現する。</p>	<p>このCDの収益金が、地雷除去のために使われることを紹介し、この問題を自分の問題として捉えられるように留意する。</p>

☆ 日本語⇄英語 の切り替えを瞬時に行う練習！！

- ① 生徒A プリントを見ながら、日本語を読む。
- ② 生徒B プリントは、伏せておく。日本語を聞き、英語に置き換える。
- ★ Bが詰まったら、Aはすぐに英文を与え、Bはそれをリピート。

【日本語】

- ① 地雷！
- ② 1億2千万もの恐ろしい武器があるかもしれない
- ③ 70以上の国の中に、世界中に
- ④ これらの地雷のほとんどは地中にあり
- ⑤ そして爆発するのだ
- ⑥ それらが踏まれた時に
- ⑦ しかし地雷は見たり聞いたりできない
- ⑧ それらは兵隊を見分けることができない
- ⑨ 子供、祖母、ウシ、ゾウから
- ⑩ 何かがそれらに触れる時
- ⑪ それらは爆発する
- ⑫ それらは非常に長い間作動し続ける
- ⑬ 50年も
- ⑭ もしかしたら、1世紀もの間
- ⑮ 地雷を取り除く運動は
- ⑯ 1990年代に始まったと言われている
- ⑰ 地雷撤去の活動は始まった
- ⑱ しかし1つの政府や機関もない
- ⑲ そんなにも多くの地雷を取り除くことができるのは
- ⑳ 多くの人々が助けなければいけない

【英語】

- ① Landmines!
- ② There may be as many as 120 million of these terrible weapons
- ③ in over 70 countries throughout the world
- ④ Most of these mines are under the ground
- ⑤ and will explode
- ⑥ when they are stepped on
- ⑦ But mines cannot see or hear.
- ⑧ They cannot tell a soldier
- ⑨ from a child, a grandmother, a cow, or an elephant
- ⑩ When anything touches them,
- ⑪ they will explode
- ⑫ They remain active for a very long time,
- ⑬ 50 years,
- ⑭ maybe even a century
- ⑮ The movement to remove landmines
- ⑯ is said to have started in the 1990s.
- ⑰ Mine-cleaning operations have begun
- ⑱ but no single government or agency
- ⑲ can possibly clear that many mines.
- ⑳ Large number of people must help.

「中学校・高等学校の英語教育の現状と課題」

① 現状

中学校

- 「聞くこと」「話すこと」に重点を置いた指導が行われており、全体として聞くことについては良好

高等学校

- 概要や要点を適切に把握するなど、読むことについては比較的良好。
- 「英語Ⅰ」において、文法・訳読が中心。また、「オーラルコミュニケーションⅠ」において「聞くこと」「話すこと」を中心とした指導が十分になされていない実態があるなど、4技能の指導において偏りがあるとの指摘あり。

中学校・高等学校共通

- コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身につけていない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身につけていない状況なども見られる。
- 英語が大切・普段の生活や社会に出て役に立つと考えている生徒は、他の教科に比べて多いのに対して、学年が進むにつれて英語が好きな生徒は減少する傾向が見られるとともに、中学校において、授業が分からない生徒の割合が他の教科と比べて高い傾向が見られる。
- 単に受信した外国語を理解するにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成がより重要

② 改善

☆ 発信力の育成

☆ 4技能の総合的な育成

参考資料 「すぐれた英語授業実践 よりよい授業づくりのために」(大修館書店 2007)

教師が延々と日本語で訳や文法の解説をし、生徒は指名されたときに指定された英文を読んで日本語に訳すだけ。こういった「伝統的(?)」な高校の授業を今なお見ることがある。ひどい場合には、一斉音読練習すらなく、英語の授業で教師も生徒もほとんど英語を使うことがない。このような授業では、オーラルコミュニケーション能力はもとより、英語を読む力も書く力もつくはずがない。「授業」と呼べるかも疑問である。このような英語授業には、抜本的な「構造改革」が必要である。

進学状況

平成20年度 大学入試結果

国公立大学合格者 228 (210) 名

()は現役で内数

難関国公立大学 68 (63) 名

東京大学	1 (1) 名	京都大学	5 (5) 名	大阪大学	15 (13) 名
北海道大学	2 (2) 名	東北大学	1 (1) 名	東京工業大学	1 (1) 名
名古屋大学	36 (34) 名	神戸大学	4 (4) 名		
国公立大学医学部医学科		3 (2) 名			

● 主な国公立大学 ●

筑波大学	5 (4) 名
横浜国立大学	1 (1) 名
金沢大学	10 (10) 名
信州大学	5 (5) 名
静岡大学	3 (3) 名
愛知教育大学	9 (9) 名
名古屋工業大学	17 (17) 名
岐阜大学	53 (49) 名
滋賀大学	2 (2) 名
奈良女子大学	2 (2) 名
広島大学	4 (4) 名
首都大学東京	1 (1) 名
岐阜薬科大学	4 (2) 名
愛知県立大学	4 (4) 名
名古屋市立大学	18 (16) 名
京都府立大学	2 (2) 名
大阪市立大学	2 (2) 名
大阪府立大学	3 (2) 名
神戸市外国語大学	3 (3) 名

● 主な私立大学 ●

青山学院大学	5 (2) 名
慶應義塾大学	6 (4) 名
上智大学	2 (1) 名
中央大学	12 (7) 名
東京理科大学	27 (22) 名
法政大学	6 (3) 名
明治大学	8 (6) 名
立教大学	1 (1) 名
早稲田大学	16 (10) 名
岐阜聖徳学園大学	36 (36) 名
愛知大学	30 (28) 名
愛知淑徳大学	19 (19) 名
金城学院大学	12 (12) 名
中京大学	39 (37) 名
豊田工業大学	8 (7) 名
南山大学	169 (159) 名
名城大学	79 (72) 名
同志社大学	77 (71) 名
立命館大学	141 (123) 名
関西大学	27 (26) 名
関西学院大学	20 (17) 名

キャリア教育を位置づけた進路指導の年間計画

岐阜北高生 進路実現のための STEP BY STEP

2 学 年	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
<p>目標：充実した高校生。高校生から受験生への意識の転換</p> <p>★文系・理系の総合的な学力の育成</p> <p>○3回の校外実習…校内での自分の位置を知ります。 ○3回の校内実習…志望校の可能性をはかれます。 ○プロシードテスト…志望校が挑戦します。 ○基礎力テスト…定期的に国・数・英の授業・受験勉強等)を聞きます。 ○先輩と語る会…教育実習生の話(大学生活・大学の授業・受験勉強等)を聞きます。 ○インターンシップ…より具体的な進路指導、アドバイスをします。</p>	<p>○大学説明会</p> <p>第1回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○1回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○2回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○3回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○4回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○5回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○6回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○7回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○8回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○9回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○10回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>	<p>○11回校外実習</p> <p>○基礎力定着テスト開始</p> <p>夏期補習</p>
	<p>○文化講演会</p> <p>○「進路について」</p> <p>○「充実した学校生活をすごすために」</p>	<p>○先聖と語ろう</p> <p>○小論文演習</p>	<p>○オープンキャンパスへの参加・報告について</p> <p>○オープンキャンパス報告会</p>	<p>○グループ研究(大学・学部・学科・入試制度・入試問題)進路について研究し、発表する。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>	<p>○道路講演会…保護者やOBから社会人の話や進路選択について聞きます。 ○ON YOUR MARK…初めてのマーク方式のテストです。 ○難関大入試説明会…難関大学の受験対策の学習方法・心構えを説明します。 ○オープンキャンパス…大学見学を行います、意欲を養います。 ○難関大見学会…東大を中心に大学見学し意欲の向上を図ります。</p>
<p>総合学習を利用したキャリア教育</p> <p>★より深く自己の適性を知り、社会のことを知り、進む方向を考える</p> <p>(達成できる)コミュニケーション能力 行動・実践力</p>	<p>情報活用能力</p> <p>行動力</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>
<p>【全学年に共通するもの】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● POWER UP PRINT PROJECT…効果的な学習プリントを配布します。(送り届下) ● 大学レクチャー(北高の先生による模範授業を体験し、興味・関心を喚起します。) ● 大学模範授業…大学の先生による模範授業を体験し、興味・関心を喚起します。(不定期) ● LOOK UP PROJECT…校外実習の上位者を張り出します(無記名)。自分の目標設定に役立ちます。(送り届下) ● 1、2年の進路検討会では、生徒の成績と志望を照らし、指導の目安とします。3年生では進路検討会と、志望校検討会①②と3回行いより具体的な進路指導、アドバイスをします。 	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>	<p>進路実現のためのSTEP BY STEP</p>

速読英単語小テスト結果

	範囲	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31
9 1		0	0	1	1	0	1		0	1	1	0	1	1	1	1	1
9 2		1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 3		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 4		0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
9 5		1	0	0	0		0			0	0	0	0	0	0	1	1
9 6		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 7			1	1	1							1				1	1
9 8		1	1	1	1	1	1	公	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 9		1	1	1	1	1			1	1			1	1	1	1	
9 10		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 11		0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	0
9 12		1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	1
9 13		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1
9 14		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 15					1					0							0
9 16		1	1	1	1	1	1	0	1		1	1	1	0	1	1	0
9 17		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 18		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1
9 19		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 20		1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 21		1	1	1	1	1	0	1	1	1	0		1	1	0	1	1
9 22		1	1	1	1	0	1		1	1	1	0	1	1	0	1	1
9 23		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 24		1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
9 25		0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1
9 26		1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 27		1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 28		1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1
9 29		1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
9 30		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 31		1	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1
9 32		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 33		0	0	1	1		0	公	0	1	0	0	1	0	1	0	0
9 34		1	1	欠	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1
9 35		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 36		1	1	1	1	1	1	公	1	1	0	1	1	1	1	1	1
9 37		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9 38																	
9 39																	
9 40																	

速読英単語テスト			
範囲 () ~ ()		2年()組()番 氏名()	
スベル	意味	スベル	意味
(1)		(6)	
(2)		(7)	
(3)		(8)	
(4)		(9)	
(5)		(10)	
 点			

高等学校の英語教育

華陽フロンティア高等学校
教諭 原 雅 幸

華陽フロンティア高校の原雅幸と申します。

華陽フロンティア高校という高校は、平成12年に新しくできた高等学校です。定時制と通信制課程が二つありまして、私は現在定時制課程の方に勤めさせていただいておりますけれども、昔の定時制というふうイメージをされますと、どうしても夜勉強する学校だなというふうになっていたかと思うのですが、私の今勤めさせていただいている高校は、3部制の定時制課程といたしまして、1部、2部、3部というふうになっております。1部は午前中から授業が始まる、2部は昼から、そして3部は昔の定時制と同じように夜行くという授業になっております。

昨年の4月に、前任校の県立岐阜商業高校から華陽フロンティア高校に転勤をさせていただきました。1年生を当初持たせていただきまして、一番初めの授業の中で、生徒たちにこういうふうに聞きました。「君たちが、もし道端で外国の人に英語で道を聞かれたりしたらどうする」と聞いたのです。生徒たちは「うーん」とうなっているのですが、選択肢を与えました。1番、中学校までで習った英語で何とか頑張って道を教えてあげる。二つ目、英語はあまりわからないけど、身振り、手振りのジェスチャーで教えてあげる。それから三つ目、ダッシュしてそのまま逃げる。あと四つ、五つ、冗談半分で選択肢も与えたのですが、多くの生徒は逃げていってしまうというような回答をする生徒が多かったのです。なかなかジェスチャーをしてまで道を教えてあげるという選択はあまり多くなかったのですが、やはり本校の生徒の多くが、ほとんどの生徒は英語が大嫌いです。アルファベットも、例えば小文字の「b」と「d」が未だに反対になってしまうとか、アルファベットがまだうまく書けない生徒も何人かおります。そんな学校に今勤めさせていただいているのですが、このたび、先ほどの遠藤先生のように、こちらの方でお話をさせていただく機会を得させていただき、今の勤務校でそれほど実績がまだないものですから、前任校の、昨年の3月まで勤務させていただきました県立岐阜商業高等学校での取り組みを中心に話をさせていただきたいと思っております。

皆さん、県岐商といいますと、まず恐らく「ぱっ」と思い浮かぶのが、例えばこの前マラソンの引退をしました高橋尚子さんとか、それから昔中日ドラゴンズで活躍をされていた高木守道さんとか、それから前は西武ライオンズで、今は中日ドラゴンズに移籍しました和田一浩さんとか、そういうスポーツ界のすごいアスリートたちの有名な選手が思い浮かぶと思っております。私も県岐商に在籍時代は、何人かその方たちとお会いして、直接お話をしたこともありますが、赴任する前は本当に凄い選手を輩出する凄い学校だというイメージを持っていたのですが、最初にこんな学校だということのをパワーポイントで少し見ていただきたいと思います。

実はこれは、今年度の県岐商の中学校説明会に使わせていただいたものを借りて、少し手直しをしたものです。県岐商でのスクールライフということで、自分のやりたいことを伸び伸び、学校行事、部活動、学習というように、多くの学校は文武両道ということ掲げておるのですが、県岐商でも同じことが言えます。目的意識のある生徒ということで、やはり県岐商に入ってくる生徒の大半が、部活動で頑張りたいとか、資格を取りたいとか、そういうものを目指して入ってきております。明るく元気な生徒、これは「凄い挨拶」ということなのですが、廊下をすれ違うたびに「こんにちは」「おはようございます」「さようなら」など挨拶の嵐です。1日に何回会っても挨拶をします。初めて行ったときはびっくりしました。それから、

「身だしなみ指導」というのが厳しいです。制服とか、頭髪とか、すごく厳しい学校です。また、「日本一」ということを目指している学校なのですけれども、商業教育を中心に部活動、そして進路達成、この「身だしなみ指導」の3本柱で目指しております。

卒業生の進路ですけれども、大体毎年進学をする生徒が7割、前年度は73%おりました。その中でも4年制大学が一番多くて66.7%、短期大学、そして専門学校というようになっております。就職の方も100年の伝統ということで、県の内外から就職の内定をすごくいただきまして、100%を確保しております。

就職の状況としましては、公務員、そして皆様が聞いたことがある企業にたくさん就職をさせていただいております。

進学の保証ということでは、後でまた詳しいお話をさせていただくのですが、やはり先ほどの遠藤先生の岐阜北高校とは全く違うアプローチをさせていただいている学校ですので、純粋に学力だけではやはり大学に進学ということはかなり難しい状況です。そこで、ここに黄色い線で書いてありますけれども、部活動、そして資格取得、こういう面を全て総合しまして、進学という方へ生徒を向かわせております。

また、資格ですが、自分は英語ですのでTOEICや実用英検とか全商英検にかかわっていませんけれども、これらの資格取得を多くの生徒たちが目指しております。

商業高校ですけれども、3年後に逆転できる、つまり普通高校へ行った生徒とは違うアプローチをするのですけれども、進学、特に国公立大学の方へも進学がきちんとできますよということをうたっています。

国公立大学と難関私立大学への進学状況ですけれども、昨年度は19名の生徒が国公立大学へ入っております。ただし、これらのほとんどがセンター試験は受けておりません。ほとんどが推薦という形で受けさせていただいております。それから、このように私立大学も含めて進学状況になっております。

これは16年度からの国公立大学合格者、毎年大体20名、少ないときもあったのですけれども、20名前後は行かせていただいております。

先ほどお話ししましたように、推薦、もしくは商業高校の枠というのがあります。そういう商業高校の枠を設けていただいている大学に推薦という形で入って入っております。なぜ入れるのかといいますと、ここに資格取得ということが書いてあるのですけれども、真ん中辺に英語力アップということで、県岐商の英語科といいますのは、大体8名から9名、自分がいたときは10人近くおったのですけれども、普通高校と同じぐらいの英語科のスタッフがおります。後でお話ししますが、国際コミュニケーション科というコースがありまして、そちらの方は、商業高校でありながら、英語を中心に勉強していくというコースがあります。そちらの方での話を後でまた、させていただきます。

それから、よその大学のことになってしまうのですが、中央大学との連携プログラムというのがありまして、このように中央大学と提携をしまして勉強をさせていただいて、中央大学に入っていくというプログラムがあります。立命館大学も同じようにこういうプログラムがあります。これは、近年マスコットとして創ったものです。

それでは、本題に入らせていただきます。実は、平成15年に私が県岐商に赴任させていただいた初めの年に文部科学省の「目指せスペシャリスト」事業というものがありました。それで、商業高校ですが自分は英語ですので「何か指定校に当たったら大変だな」というようなイメージしか抱いていませんでした。ところがある日、商業科育成推進部長に呼ばれて、「実はこういう指定校に当たったのであなたも一緒にやってくれ」ということを言われ「自分は商業じゃないので、英語ですので、そういうことはあまりよく分かりません。」という返事しかできなかったです。ところが本校には流通ビジネス科、それから情報処理科、会計システム科、そして国際コミュニケーション科の四つの科がありますので、その四つの全ての科を中心

にして、ここに書いてあります「個に応じたより高度な資格取得をとおして、経済・社会の変化に対応できる生きる力の育成を目指した商業高校の在り方」それを追求して欲しいというお話がありました。「Super Business High school」通称「S . B . H .」と呼んでいましたが、研究開発の特徴として外部の人的資源の協力を得ていくとなっています。どういうことかという、自分としてはあまりイメージができなかったものですから、順に進めていくうちに分かってきたことは、「ねらい」を定めることでした。まず資格取得ということ、それから社会の環境変化などに対応できるスペシャリスト、それから社会におけるリーダーシップを発揮できる生徒たちに、線引きのような形で「ねらい」を定めました。そこで、それを具体的にこのように四つの「ねらい」について設定させていただきました。研究内容と方法なのですけれども、1 番目のコース設置、それから県岐商ビジネス塾ということを含めて、これからちょっと説明していきたいと思います。

まず一つ目のコースですが、先程申しました流通ビジネス科を Super Marketing コース、そして情報処理科を Super IT コース、そして会計システム科を Super Accounting コース、国際コミュニケーション科を Super Communication コースというように設定し、それぞれここに書いてある資格取得を目標としました。特に国際コミュニケーション科においては、実用英語検定の準 1 級と 2 級、そして TOEIC700 点というすごく高い目標を設定していました。自分は今まで勤めさせていただきました普通高校では、結構進学校も勤めさせていただきましたが、英検 2 級を受かることはなかなか難しい状況です。ましてや TOEIC700 点を取るということは大変なことです。それを商業高校で本当にできるのかということを経験は心配しました。

それぞれのコース指導体制確立ということで、自分は商業科目の検定に関してはあまり知りませんが、ここに書いてある目標の級というのはかなり高いものだと思います。Super Communication コースは、このような「目標設定」をさせていただいておりますが、「評価基準」を作成しまして資格取得の変遷を平成 14 年度から見ていくと、英語に関係するところですが、大変厳しい状況です。平成 14 年度に準 1 級取得者が居ましたが、一番苦しかったのはやはり実用英検 2 級の取得者数が減ってきたということです。他の三つの科は段々右上がりなのです。ところが、国際コミュニケーション科だけは段々右下がりになってきて「一体英語科は何をやっているのだ」ということで、面と向かって言われることはないですが「ちょっと頑張らないかんよ」ということを結構密かに言われたりしていました。平成 17 年度の状況も先程言いましたように、それ程英語関係の資格取得者数は増えてはいませんでした。商業系の部活動の大会、簿記部とかそれからコンピュータの EDP 部というのがありますが、それらの部活動では毎年このように素晴らしい成績を修めております。また、「ねらい」の達成度ということで先程申しました国際コミュニケーション科以外の科ではかなり上昇志向で、生徒達の意識もかなり高まってきているということが途中まで言えました。

次に県岐商ビジネス塾というのは一体何かということですが、ここに大学とか専門学校とかのお名前を書かせていただいております。つまり先程言いました外部の先生方、大学の先生とか専門学校の先生とか企業の方に外部講師として学校の方へ来ていただきます。岐阜大学の方からも今は他大学に替わられたのですが、英語教育の大和先生という方に県岐商の方でスーパーティーチャーになっていただき、授業をしていただいたりとかアドバイスをいただいたりとか色々ご助言をいただきました。TOEIC 講座、そして英会話とか後は国際関係のお話等をしていただいております。お手持ちの資料の中にもその場面の写真等が入っておりますので、またご覧下さい。

同じように英会話学校です。「ジオス」という英会話学校がありますが、そちらの方からネイティブの方達に来ていただき、本校の ALT と共同で英会話の授業を定期的に行っていただきました。それから、「ふれあい会館」から JICA の方に来ていただき、貿易ゲーム等の勉強をさせていただきました。パソコンの組み立てとかテレビ会議システムの利用等、こういうも

のも行っておりました。また、インターンシップもしくは職場見学ということでそれぞれの会社等へお願いしました。

「ねらい」の達成度として、生徒たちの感想とか見させていただきますと、確かに「意欲が高まった」「すごくやる気になった」「資格取得にすごく勉強になった」という話を聞くのですが、先程国際コミュニケーション科の話にもありましたように、なかなか実用英検のレベルが上手く上がらなかったというところがあったと思います。それが段々緩やかに右上がりになっていきまして、研究指定が3年間あったのですが、この3年目にして徐々にではありますけど2級が受かりつつありました。自分が最後の年には、何とかクラスの大半で2級が受かるようになってきたので大変良かったと。英検は3回ありますので、第3回でぎりぎりに受かることができ、生徒達もやっと芽が出てきたということで喜んでおりました。

今ここに書いてあります「高大連携」ということで、先ほどの中央大学の流れとか、こういうものが書いてありますが、ここら辺は英語教育とは少し外れておりますので、早目に次に送りたいと思います。このような形で高校と大学の連携をしているというように思ってください。

学びの連続ということで、このような形になっております。

評価方法は生徒たちのアンケート、運営指導委員会といいますのは、外部の方に指導していただくということで、十六銀行の頭取の方とかそのような経済界の方に来ていただきまして、いろいろご助言をいただきました。運営指導委員会のご指導がこのようになっております。

生徒たちの意識としましては、やはり向上した、大変向上したという気持ちがすごく高まってきました。キャリア意識、現在学んでいる資格を生かした職業に就きたいか、これはやはり商業高校ですので、自分たちが専門にやっていることを将来生かしていきたいという気持ちがさらに高まってきたと思います。

進学準備、先ほどの数ですね。やはり工学系、情報系、ITコース、情報処理科の方ですけれども、そういう方面に進む生徒も沢山居ります。「経済系商業」と外部の講師の先生からは、このようにお言葉をいただいておりますけど、二つ目に、授業力ということですね、授業改善に努めて欲しいということですが、何分これは外部の先生方に来ていただいて、例えば授業をしていただいたりとか、見学をさせていただいたりとか、アドバイスをいただいたりとか、そういうことが結構多かったです。一つ大事なことで、やはり私たちが高校の教員として実際に携わっている。接しているのは、やっぱり生徒と携わっているのは、私たちですよ。だから、その学校にいる先生自体の授業力の向上、そして授業の改善ということが必要だということをおっしゃられました。これが3年間の指定で終わってしまったわけですが、継続をして今もやっているということですが、ここにも書いてある授業力の向上と高度な資格取得における指導と評価の一体化、働くことの意義ということ。それから下から三つ目の普通教科の充実。これは自分も普通教科の人間ですので、同じことが言えると思います。やはり英語だけでなく、数学や社会や理科等その他の科目に関しても、もう少し充実をさせていく必要があるということをおっしゃられました。

このように本当にいいことばかりだということではないのですけれども、一つ県岐商という学校がすごく部活動が盛んな学校であるということはお存じだと思いますけれども、自分もテニス部の顧問をさせていただいておまして、男子でしたけれども毎年県で優勝してインターハイへ行って、絶対勝たなければならないという宿命を抱いていました。そういう部活動の顧問をしながら、このような研究も行いながら、そして当時この研究の発表のときには3年生の担任もさせていただきました。ちょうど今から3年前の10月、11月にすべて重なってしまったのです。生徒たちの推薦書と調査書を書かなければならない、そして東海選抜で静岡まで遠征をしなければならない、それからこの研究発表ということで、1ヵ月間睡眠時間が3時間しかないという状態で、もうふらふらになって行っておりました。ただそれ以上にすごいのはやはり生徒達です。生徒達はそれ以上に部活で搾られているわけですから夜は遅いです。授業が

終わってもすぐに帰らず、勿論毎日部活を行います。平日でも4時間の部活です。グラウンドとかテニスコートには照明が点いておりますので、延々と部活ができます。自分も9時、10時まで部活を行った後、自分の部屋に戻って教材研究やこの仕事等も終えた後、帰るのが10時、12時というような生活もしていましたが、生徒たちはそれも行いつつ、また朝早く学校へ来て、朝練習後に授業を受けていました。彼らは一体何時に寝ているのか。学校に来て勉強と部活を行い睡眠時間は先生より少ないのかなと思っていました。案の定、授業中にうとうとしている生徒も何人かおりましたし、精一杯頑張っているのに落ちこぼれた生徒はいないのかとか、ついていけない生徒はいないのかと思われませんが、実際に何人か居りました。そういう生徒たちは、やはり「ほったらかし」にすることはできませんので、個人的に呼んで追試を行ったりとか、個人的指導を行ったりするのですが、「絶対100%」ということは言い切れませんでした。ただ、その生徒達なりの目標をきちんと達成出来るようにしてあげることが私たちの使命だと思いました。たとえ英検が準2級しか受からなくてもそれは、その生徒達が一生懸命頑張ったということの評価してあげるべきなのだとということです。

それから、全ての教員がこれに携わっていたわけではありません。やはり商業高校の先生と英語科の先生がコラボレーションという形で行っていたものですから、どうしても先生方の負担というものがあまして、なかなか十分、先ほど言いましたように、何でもかんでもやらなくてはならないという状況が一番負担だったと思います。しかし、生徒達は純粋な生徒が多くて「これを頑張ったら絶対に志望校に行けるんだ」とか、「受かるんだよ」ということを何度も何度も励まして行っていると、本当に一生懸命頑張ってくれました。なかなか上手いかわない生徒たちに対し、県岐商という学校の中なら絶対に上手いくのだからということで励ますことがやはりプラスに繋がっていったのかなということをおもっています。

次に国際コミュニケーション科に関して中心に行ってきたこと、評価等の纏めが書いてありますので、またご覧おき下さい。

つたないしゃべりで本当に言いたいことが上手く言えなかったのですが、最後にまた自分の学校に戻るのですけれども、3年間このように行ってきて、今居る学校が全く180度違う学校ですので、今は生徒指導と教育相談に追われる毎日で、アカデミックな形での英語教育という場面とは、今ちょっと遠ざかっているなあというところにおります。でも、アルファベットが十分に書けない生徒に対してでも、3年間やってきてよかったなあ、楽しかったなあと思えるようなものを積み上げて行ってやればいいのかなあということをおもっています。

今後も先生方のご意見を参考にしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

商業高校における英語教育 1

国際コミュニケーション科

1. より高度な資格取得を達成するコースの設置

国際コミュニケーション科を Super Communication コースとし、以下の検定に取り組んだ。

① Super Communication コース資格取得目標

- ・ 実用英語検定準 1・2 級の合格
- ・ TOEIC 700 点以上の取得
- ・ 大学・専門学校進学後等、国際社会で活躍できる人材・国際人の育成

② コースの教育課程

高校在学中のより早期に実用英語検定準 2 級を取得し、その後 2 級や準 1 級に挑戦したり TOEIC で高得点を目標にしたりできるよう、より高度な内容を学習できる環境を整える。

高度な資格取得後は、外部講師の招へいなどにより、国際経済に関する知識の習得や国際社会を取り巻くさまざまな諸問題について考える機会を与え、豊かな国際感覚を身に付けさせるとともに、国際社会で活躍できる能力と態度を育成する。

□ 1 年生

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
国語		公民		数学		理科		保体		外国語						商業						L H R							
国語総合		現代社会		数学 I		理科総合 A		体育 保健		英語 I		OC I		英語表現		ビジネス基礎		簿記											

1 年次には外国語の科目を計 7 単位配当し、リーディング・ライティング・スピーキング・リスニングの基礎・基本を身につけさせる。また、「オーラルコミュニケーション I」では、ALT による授業も毎週取り入れ、英語によるコミュニケーション能力のさらなる育成を図る。

□ 2 年生

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
国語		地・歴		数学		保体		外国語						家庭		商業						L H R							
国現代文		※国表 I 古典		世界史 A		数学 A		体育 保健		英語 II		OC II		リーディング		英語表現		家庭基礎		会計			原価計算		情報処理				

2 年次には外国語の科目を計 8 単位配当し、到達目標を実用英語検定 2 級の合格に置く。さらに、同準 1 級や TOEIC 700 点以上にも挑戦させる。また、商業の分野でも日商簿記検定 2 級、全商簿記検定 1 級などの合格を目指し、英語、商業ともにバランスよく、高度な資格を取得できるような環境を整える。

□ 3 年生

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
国 語				地・歴		理科		保体		芸術		外国語						商 業						L H R					
現代文		※国表Ⅱ・ 古典		※日・地		※物・化・ 生ⅠA		体育		音・美 ・書※		英語Ⅱ		OCⅡ		リーディング		※数Ⅱ・英語表 現・国際ビジネス		課題研究		総合実践							

3年次の到達目標は、2年次から継続して、実用英語検定2級・準1級、TOEIC 700点以上とする。さらに、商業科目等において、国際経済に関する講義、英文によるホームページの作成実習などを推進することにより、生徒の英語や国際経済に対する興味・関心を高め、豊かな国際人の育成を目指す。

③挑戦した資格

- 1年生・・・実用英語検定準2・2級（6～7月）、全商英語検定2級（9月）、実用英語検定準2・2級（10～11月）、国連公用英語検定C級（11～1月）、実用英語検定準2・2級（1・2月）
- 2年生・・・TOEIC IP（4月）、実用英語検定準2・2・準1級（6～7月）、TOEIC IP（7月）、全商英語検定2・1級（9月）、実用英語検定準2・2・準1級（10～11月）、国連公用英語検定C級（11～1月）、TOEIC IP（12月）、実用英語検定2・準1級（1～2月）
- 3年生・・・TOEIC IP（4月）、実用英語検定2・準1級（6～7月）、国連公用英語検定C・B級（6～7月）、TOEIC IP（7月）、全商英語検定1級（9月）、実用英語検定2・準1級（10～11月）、国連公用英語検定C・B級（11～1月）、TOEIC IP（12月）、実用英語検定2・準1級（1～2月）

④その他

- 部活動との連携（Super Communication コースは英会話部と連携）
- 評価と指導の年間指導計画と単元別の評価規準の作成
- SBH教材の貸与
TOEIC テキスト、TOEIC 学習参考書、Listening 教材（Speed Learning・English Adventure）
- 英文によるホームページの作成実習（3年生科目「総合実践」にて）



〔英文ホームページの生徒作品〕

2. 県岐商ビジネス塾の構築

①国際コミュニケーション科ビジネス塾の構築

スーパーティーチャー	
岐阜大学教育学部 助教授	目指せスペシャリストの運営委員として、国際コミュニケーション科を総括して指導・助言を受ける
岐阜女子大学 教養・言語センター 助教授・講師	TOEIC 講座を1・2・3年生に対して実施。また、スピーチコンテスト対策講座を1・2・3年生に対して実施
名古屋学院大学 教授・助教授	大学訪問を行い、そこで英会話講義、国際経済講義、施設見学等を2年生に対して実施
株式会社第一システム 会長	国際関係講義を2年生に対して実施

アシスタントティーチャー	
名古屋学院大学 非常勤講師	実用英語検定の内容を踏まえた英会話教室を1年生に対して実施
トライデント外国語 専門学校 講師	実用英語検定対策講座を1・2・3年生に対して実施（準2級・2級：1年生、準1級・二次：1～3年生）
株式会社ジオス ネイティブ講師	ネイティブスピーカー4名による英会話教室を2・3年生に対して実施
JICA 岐阜県 国際協力推進員	ワークショップ（貿易ゲーム、ストリートチルドレンなど）を3年生に対して実施



〔岐阜大学教育学部助教授〕



〔岐阜女子大学講師〕



〔株ジオスネイティブ講師〕

3. 企業との連携

①株式会社第一システム会長による国際関係講義を実施

国際的な立場から産業界において活躍できる人材の育成を図る目的で、岐阜市内の企業である株式会社第一システムの会長を招いて、国際関係講義を実施。「海外で活躍する日本青年たち」と題して、広い視野を持って国際的に活躍すること、世界に挑戦することの大切さを教えていただいた。

② JICA によるワークショップの実施

岐阜県国際協力推進員を招いて、ワークショップを年に2回実施。1回目は「貿易ゲーム」、2回目は「ストリートチルドレン」をテーマにした内容で、発展途上国の経済的立場と先進国の経済的立場を理解させ、体験を通して豊かな国際感覚を身に付けさせることができた。

③国際交流センターでのインターンシップ

国際交流センターでは、英会話講座の準備と講座への参加、センター発行の資料冊子づくり、電話応対などの体験をした。



〔㈱第一システム会長〕



〔JICA 岐阜県国際協力推進員〕



4. 高・大学等の連携

①名古屋学院大学訪問

平成 16～17 年度の 2 年間、名古屋学院大学外国語学部瀬戸校舎を訪問し、英会話講義、国際経済講義、施設見学等を体験した。



〔名古屋学院大学での英会話講義〕



〔同大学での国際経済講義〕



〔同大学での施設見学〕

5. 高・高等学校連携

①海外研修先（シドニー）のセント・アイビス高校との交流

国際コミュニケーション科の 2 年生が、8 月下旬～9 月上旬に 9 日間の海外研修を実施した。研修先はオーストラリアのシドニーで、異文化理解や英語によるコミュニケーション能力の向上を主な目的としている。研修の内容は、現地高校（セント・アイビス高校）での語学研修やさまざまな交流活動、ホームステイ体験、市内班別研修や牧場体験などである。特に、現地高校での語学研修では、英会話だけに止まらず、国際経済、オーストラリアの地理や食べ物、生活習慣などにも触れ、充実した研修ができた。



〔現地高校での語学研修〕



〔現地高校生との交流〕



〔文化交流会（空手の紹介）〕

②海外高校（コリンダ高校）との TV 会議による交流

平成 18 年 2 月下旬に、国際コミュニケーション科の 2 年生が、海外の高校と TV 会議で交流した。これは、本校生徒数名が県立長良高校へ出向いて一緒に参加させていただくという形で実現したものである。相手校はオーストラリアのコリンダ高校で、自己紹介、日本の知っている都市、日本の TV 番組などについて英語で会話をした。緊張しながらも、和やかな雰囲気での交流することができ、お世話になった研修管理課や長良高校の先生方には、心より感謝を申し上げたい。



〔長良高校での TV 会議システムを用いたコリンダ高校との交流〕

6. 中・高等学校との連携

①中学生に対して国際コミュニケーション科 PR ポスターを配布

10 月の中学生一日入学や 11～12 月の本校商業科教員による中学校訪問において、国際コミュニケーション科 PR ポスターを配布した。中学生やその保護者、中学校の先生方に本校の教育内容、国際コミュニケーション科の特色などを理解してもらうのに有効な方法であったと考えられる。

②英語ワークショップに参加

8 月 18～19 日の 2 日間、国際コミュニケーション科の 3 年生数名が、岐阜市教育研究所で行われた英語サマーワークショップに参加した。この生徒たちは皆、自主的に進んで参加し、英会話を楽しみながら、積極的に取り組んでいた。テーマに沿った英語による寸劇やゲームなど、英語によるコミュニケーション能力の向上を目指して、さまざまなコミュニケーション活動を実践した。

そのワークショップで、地域の各学校から参加していた多くの ALT や中学生たちと本校生徒とが交流する機会を得ることができた。このワークショップは、本校の PR や情報交換の場としても十分効果があったと考えられる。



〔寸劇の準備・打ち合わせ〕



〔寸劇の披露〕



〔閉会式での感想発表〕

商業高校における英語教育 2

国際コミュニケーション科

研究の評価

1. より高度な資格取得を達成するコースの設置

①ねらいの達成度

I. 高度な資格取得をとおした専門性の深化

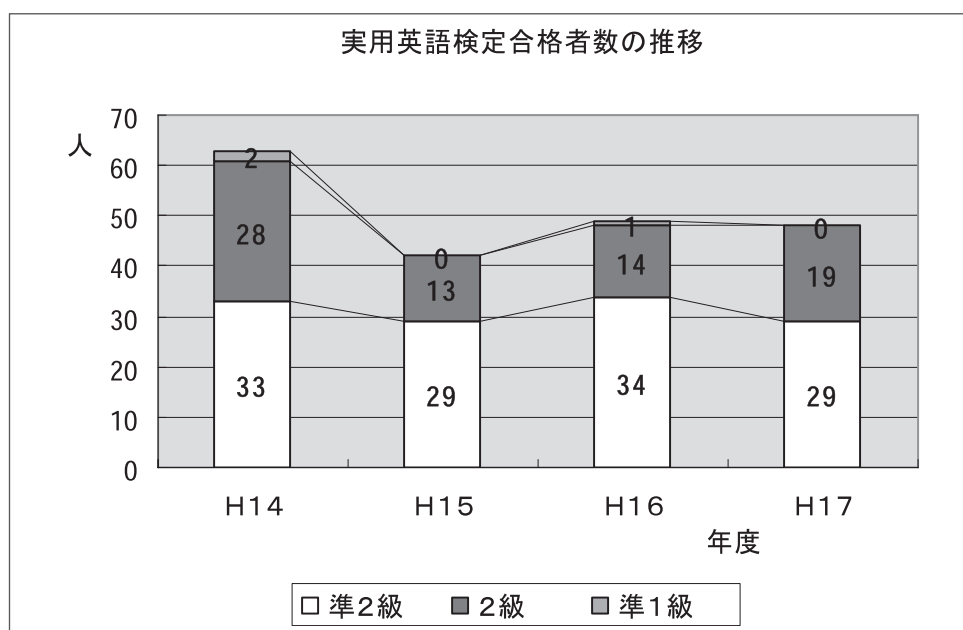
a. 資格取得状況

学科に Super Communication コースを設置したことで、より高い資格に目標を設定し、検定に対する姿勢や学習意欲を大きく向上させることができた。その結果、実用英語検定 2 級は合格者数が増加傾向にあり、全商英語検定 1 級も平成 17 年度は 1 年前より合格者数が倍増している。

また、実用英語検定 2 級合格者の中には、準 1 級に挑戦し続ける生徒もいる。その生徒たちは、不合格ながらも判定 A まで達しており、次回に向けて意欲的に努力している。

[資格取得状況] (数字は、国際コミュニケーション科 1～3 年生の合格者人数)

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
実用英語検定 準 1 級	2	0	1	0
実用英語検定 2 級	28	13	14	19
実用英語検定 準 2 級	33	29	34	29
TOEIC 700 点以上	(未実施)	(未実施)	2	1
全商英語検定 1 級	26	21	15	29



b. 基礎学力の向上

より高い資格を目標とするコースを設置することによりそれまで「挑戦目標」であった実用英語検定2級が「到達目標」となった。これにより、生徒のモチベーションが向上し、さらに実用英語検定準1級やTOEIC700点以上へ挑戦する生徒が何人か出るようになった。年間の合格者数は平成14年度より減っては入るが、検定の難易度が上がったことや個々の取り組み姿勢から考えると、生徒の学力は決して下がってはならず、モチベーションも高まっていると考えられる。

また、TOEICの公開またはIPテストにおいて平成16～17年度の2年間で、700点台が3人、600点台が2人、500点台が10人となった。全国高校生の平均点が300～400点である中、ハイスコアを記録する生徒も何人か出た。

c. 教育課程について

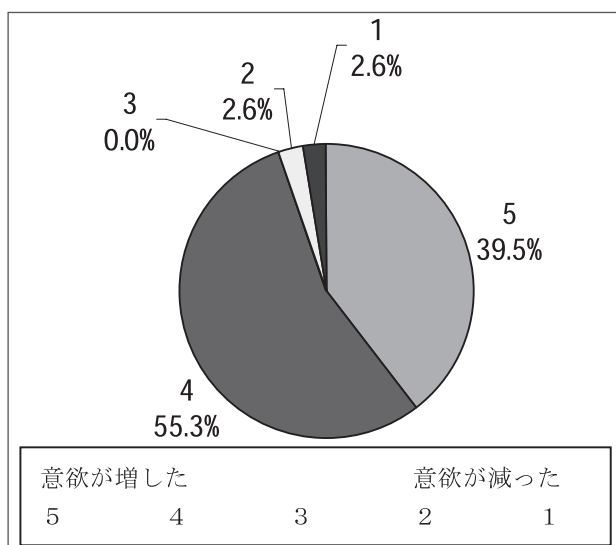
1年次には外国語の科目を計7単位配当し、リーディング・ライティング・スピーキング・リスニングの基礎・基本を身につけさせることができた。また、「オーラルコミュニケーションI」では、ALTとのティームティーチングの授業も毎週取り入れ、英語によるコミュニケーション能力の育成を図ることができた。2年次には外国語の科目を計8単位配当し、到達目標を実用英語検定2級の合格に置いて指導した。さらに、同準1級やTOEIC700点以上にも挑戦させ、個に応じて目標級を設定しながら、各種検定に積極的に挑戦させていった。

また、3年次には、商業科目等において、国際経済に関する講義、英文によるホームページの作成実習などを推進することにより、生徒の英語や国際経済に対する興味・関心を高め、豊かな国際人の育成を図ることができた。外部講師による出前授業も年間指導計画の中に位置づけ、講義、ワークショップ、英会話実践などさまざまな活動が可能となった。

d. アンケートより

(平成17年度後期に実施、Super Communicationコースの3年生対象)

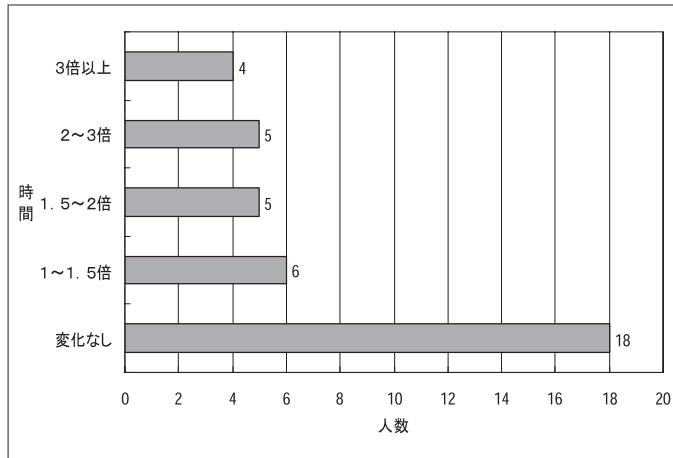
Q. SBH事業の前と後とを比べて、英語の学習に対する意欲が以前よりも増しましたか。



平成17年度卒業生のうち、およそ95%の生徒が、SBH事業前(1年生初期の頃)と比べると、英語の学習に対する意欲が増したと感じている。

入学当初も英語に興味を持っている生徒は多かったが、当コースでいろいろな事業や検定に取り組むうちに、英語をもっと身に付けたいという思いが高まり、このような結果になったと考えられる。

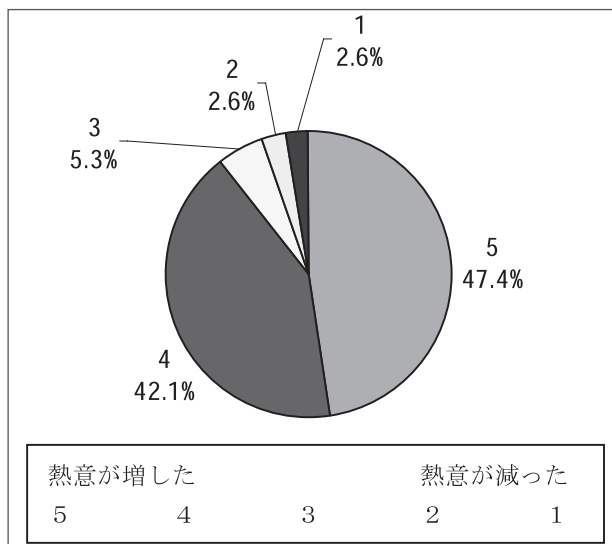
Q. 授業以外での英語の学習時間（1週間あたりの平均的な時間）は、SBH事業の前と比べて、どれぐらい増えましたか。



平成17年度卒業生のおよそ半数が、SBH事業前より、英語の学習時間が増えたと答えている。

半数近くは変わっていないと答えているが、意欲が増したのは事実であり、部活動で時間が取れない生徒、一人になると勉強に打ち込めない生徒も多くいるようである。学習する機会や教材を与えられるばかりでなく、自ら進んで取り組む姿勢がさらに必要であると考えられる。

Q. 英語の資格取得に対する熱意は、SBH事業の前よりも増えましたか。

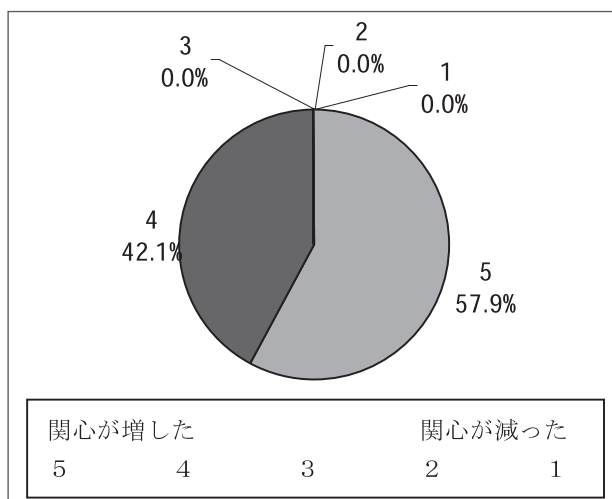


平成17年度卒業生のうち、およそ90%の生徒が、SBH事業前と比べると、英語の資格取得に対する熱意が増したと答えている。

外部講師による出前授業、海外研修などが、資格取得へのモチベーションを高める大きな要因の一つになっているからであろう。

今後もこの取り組みを継続し、生徒の意欲の向上に役立てたい。

Q. 国際社会、国際経済に対する関心は、SBH事業の前よりも増えましたか。



平成17年度卒業生の100%が、SBH事業前と比べると、国際社会、国際経済に対する関心が増したと答えている。これは、外部講師による出前授業、海外研修など、さまざまな取り組みが大きな要因と考えられる。

今後もこの取り組みを継続し、国際感覚豊かな生徒の育成に励んでいきたい。そして、将来、国際社会で活躍できる人材として社会に送り出したいと考えている。

< SBH 事業を受けた生徒の感想より >

この事業は、ちょうど私たちの代が中心となって受けられるので、とても幸運なことであり、ありがたいと思いました。それぞれの講師の先生の講義はとても分かりやすく、楽しく学習できました。今回受けさせていただいた講義の学習内容を活かしてスペシャリストを目指し、これからも一生懸命学習に取り組んでいきたいと思えます。

上記の生徒の感想からもわかるように、コースを設置したことにより、外部講師の派遣や資格取得の位置づけが明確になり、さまざまな事業に取り組みやすい環境が整ったといえる。外部講師の先生により、生徒の意識に「もっと勉強したい」という気持ちが芽生えてきたことも事実である。外部講師を招へいすることは、生徒の意欲・関心を高めるのにたいへん有効な方法であったと考えられる。

e. 教員の連携

商業高校としての国際コミュニケーション科における商業科教員と英語科教員の連携も、この「目指せスペシャリスト事業」の成功につながったと考えられる。商業と英語の接点をうまく活かし学習することによって、いっそう国際感覚を磨き、国際問題に関心を抱かせることができたと思われる。

今後とも商業科と英語科のコラボレーションを継続していきたい。

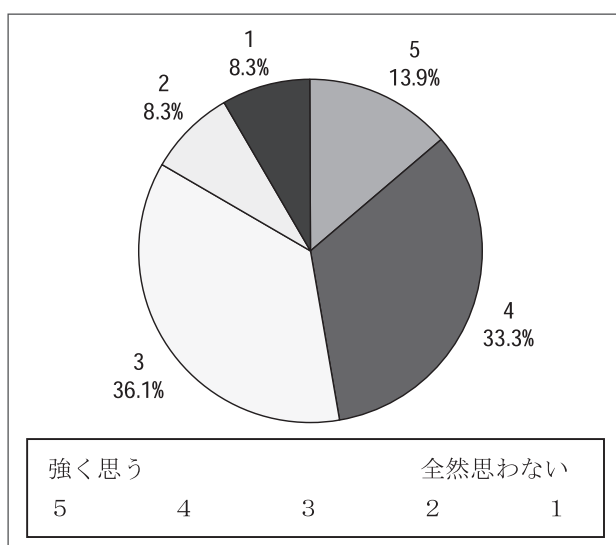
II. 望ましい職業観・勤労観の育成

資格取得の学習や外部講師の講義などを通して、英語や国際関係のビジネスに興味・関心を持たせることができた。また、商業科目である「総合実践」などの授業を通して、ビジネスマナーの習得や責任感を身に付けさせることができ、生徒は働くことの厳しさや尊さを理解するようになった。

[アンケートより]

(平成 17 年度後期に実施、Super Communication コースの 3 年生対象)

Q. 各種目指せスペシャリスト事業を受けることで、進路意識が高まりましたか。



平成 17 年度卒業生の約半数が、目指せスペシャリスト事業を通して進路意識が高まったと答えている。

特に、国際関係のビジネスに興味を抱いたり、国際情勢に関心を持ったりすることができるようになったことが、意識の高揚につながったと考えられる。

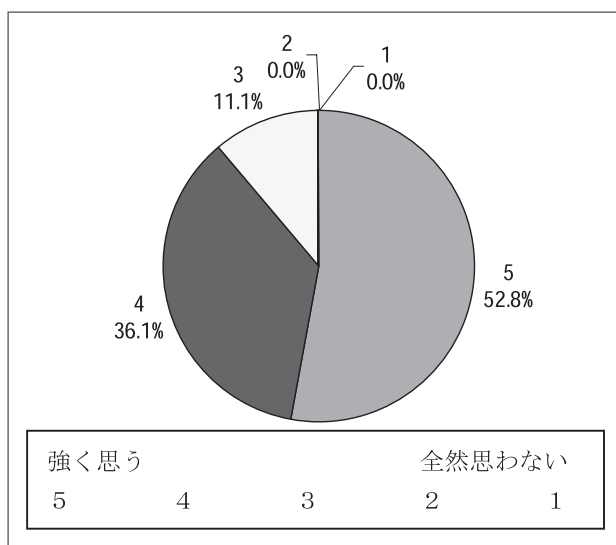
Ⅲ. 生涯学習の基礎的な資質の育成

卒業後上級学校へ進学し、英語関係や国際関係分野のスペシャリストを目指す生徒が増加した。また、卒業後でも実用英語検定や TOEIC に挑戦し続けたいと考える生徒もみられるようになってきた。特に、平成 17 年度卒業生に関しては、卒業間際の実用英語検定にも多数が受験するなど、最後まで資格取得に挑戦し続けようという姿勢がみられた。

[アンケートより]

(平成 17 年度後期に実施、Super Communication コースの 3 年生対象)

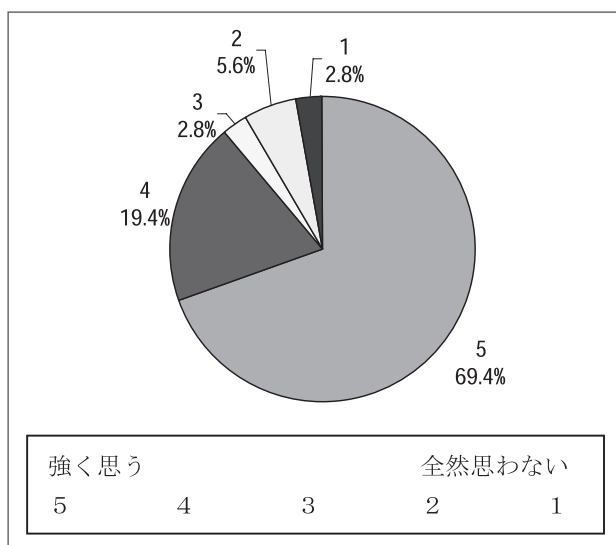
Q. 高校時代学んだ英語や国際経済の知識は、今後あなたの人生のどこかで役に立つと思いますか。



平成 17 年度卒業生の約 90% が、高校時代に学んだ英語や国際経済の知識が将来に役立つと答えており、半数以上がそれを強く感じている。

また、英語を学ぶのは単に資格取得や進路目標達成のためだけではなく、英語をコミュニケーションの道具として捉え、将来、いろいろな国の人とコミュニケーションをしたいという意識が高まったと考えられる。

Q. 卒業後も各種英語検定や TOEIC、その他商業に関する資格に挑戦していきたいですか。



平成 17 年度卒業生の約 70% が、高校卒業後もいろいろな資格に挑戦していきたいと考えている。

生涯学習の基礎的な資質を育成するという観点からみても、望ましい結果といえる。さまざまな資格取得に挑戦してきた中で、卒業後も自分の可能性をもっと試したいという気持ちの表れであろう。

取得したい資格（複数回答可）

実用英語検定準1級	多数
TOEICでのハイスコア	多数
公認会計士	2人
秘書検定	1人
旅行業務取扱責任者	1人
漢字検定	1人
公務員	1人

今後、取得したい資格として、英語以外の分野もいくつか挙がってきている。会計士、秘書、旅行業務取扱責任者などその目標も多種多様で、さまざまな資格へのニーズがあることがわかる。

IV. 進路状況（過去4年間）

Super Communication コースの進路状況をみると、約80～90%が進学している。進学の内訳をみると、進学者の内50%～60%の生徒が、外国語または国際関係学部へと進学している。また、進学者における外国語・国際関係学部への進学率は当研究を始めて以降増加傾向にある。

具体的な学部名は、「外国語」や「英語」の他、「現代国際」、「国際文化」、「国際言語」、「国際コミュニケーション」などさまざまで、進学していった生徒は皆、将来国際社会で活躍したいという夢を持ち、向学心に燃えてがんばっているようである。

V. 部活動との連携

Super Communication コースの生徒の多くが「英会話部」に所属しており、本校のALTの協力を得て英語スピーチコンテストに取り組んだ結果、当研究の成果が表れてきた。

[コンテストの成績]

全国商業高等学校協会主催 英語スピーチコンテスト 岐阜県予選
平成15年度 レシテーションの部 優秀賞
平成16年度 レシテーションの部 最優秀賞（全国大会出場）
平成17年度 レシテーションの部 優秀賞

2. 県岐商ビジネス塾の構築

①ねらいの達成度

I. 高度な資格取得をとおした専門性の深化

教育課程上の年間指導計画にビジネス塾を取り入れることにより、生徒の英語学習に対するモチベーションを高めることができた。具体的には、さまざまな外部講師の講義によって、英語学習に対する意欲・関心が高まり、家庭で英検の問題集に取り組むなど、積極的に英語の実力を身に付けようとする生徒が増加した。また、ALTや留学生に積極的に話しかける生徒、地域の英語研修活動に進んで参加する生徒なども多くみられるようになった。

[アンケートより]

Q. 外部講師招へい事業で、自分が3年前と変わったと思うところはどんなことですか。
(平成17年度後期に実施、Super Communication コースの3年生対象)

- ・国際協力について考えられるようになった。
- ・世界情勢をもっと知りたいと思うようになった。
- ・英語の本を読むようになった。
- ・英会話を意欲的にしようという気持ちが増した。
- ・自分がどのような進路に進むべきかを考えることができた。
- ・国際的に活躍する職業について関心を持つことができた。

Q. 外部講師の先生による講義を受けた感想（各講義のアンケートより）

（平成 15～17 年度に実施、Super Communication コースの 1～3 年生対象）

- ・勉強することに積極的になろうと思えた。勉強の仕方次第で勉強が楽しくなるとわかったので、まず計画を立て、やってみたいと思った
- ・講師の先生（ネイティブスピーカー）に自分の英語が伝わるのはとてもうれしく、もっと話せるようになりたいと感じた。
- ・このゲームは本当に世界の状態をよく知ることができて、とても勉強になった。もっともっと貧しい国について知って、どうしていくべきか考えたい。
- ・今まで、どのように勉強していいのかわからず困ったけど、今日の講座に参加することにより、できるかもしれないと思うことが多く、やる気が出てきて良かった。

II. 望ましい職業観・勤労観の育成

現在学習している英語やその資格が、将来、国際社会やビジネスの場において、どのように活かされるかについて講話を頂くことにより、学習への動機付けがなされた。また、いろいろな講義を通して、コミュニケーションの大切さや、自ら意思決定し責任を持つことの大切さなど、社会人として求められる資質についても話を聞くことができ、職業観・勤労観を育成することができた。

Q. 外部講師招へい事業で、社会人としてどのような資質が大切だと感じましたか。

- ・ビジネスマナー
- ・挨拶の大切さ
- ・人との接し方
- ・コミュニケーション能力の大切さ
- ・いろいろな知識を得ることの大切さ
- ・英語ができれば世界が広がること

外部講師から社会人として大切なことを多く学び取っているということがわかる。この事業が生徒たちにとって、望ましい職業観・勤労観の育成に大きく役立ったと考えられる。

III. 中・高・大等連携体制のあり方についての模索

研究 2 年目を終えてから、それまでの反省により、本校の英語科教員と外部講師との役割が明確に分けられることになった。すなわち、資格取得に向けた英語の指導そのものは本校の英語科教員が行い、英語学習の動機付けや豊かな国際感覚の育成に向けては、外部講師の力を借りるというものである。

研究 3 年目からは、実用英語検定の外部講師は招へいせず、TOEIC の外部講師のみとした。それ以外の外部講師の招へいは、主に英語学習の意欲向上を目的としたものとし、その実践により生徒の高度な資格取得へとつなげることができた。

また、このことは、本校の英語科教員の授業改善、指導内容の見直しなどにもつながった。外部講師の出前授業に頼るばかりではなく、自らの指導力向上に向け一層の研修に励もうとする雰囲気が見られるようになってきた。この事業は英語科教員の意識改革にも大

きな影響を与えたといえよう。

3. 企業との連携

①ねらいの達成度

I. 高度な資格取得をとおした専門性の深化

実際に海外で活躍する青年の話聞かせることにより、英語学習への動機付けが行われた。また、現在自分が学習している英語が将来にどう結びつくのかを理解させることにより、英語を学ぶ意義を再認識させることができた。

II. 望ましい職業観・勤労観の育成

第一システムの会長による講義の中に、「海外で活躍するには、勇気・情熱が必要であり、そのために、相手と会話ができる語学力を必要とする。」という話があった。この話は生徒にとって、なぜ英語を学習するのかがよく理解でき、かなり刺激を与えることができたと評価している。

また、JICAのワークショップにおいても、疑似体験をさせることによって、発展途上国の経済的立場と先進国の経済的立場について理解させたり、ストリートチルドレンなど世界を取り巻く諸問題について真剣に考えさせたりすることができた。

国際交流センターでの就業体験は、県の国際交流事業の一端を担い、国際社会に目を向けさせ、望ましい職業観・勤労観を育成することをねらいとしていたが、希望者がおらず研究1年目でしか実施できなかったのが残念である。

III. 生涯学習の基礎的な資質の育成

これらの体験により、英語を学習する意義を再認識させるとともに、国際的な視野を広めることができた。ほとんどの生徒が英語によるコミュニケーション能力と国際感覚を身に付けることの大切さを実感しており、本校卒業後もそれに向けて努力したいと答えている。

4. 高・大学等の連携

①ねらいの達成度

I. 大学訪問の成果

大学を訪問して、大学教授や講師の先生の講義を直接受け、ほとんどの生徒が、もっと英語を学習したいと感じることができたようである。将来のことや現在やらなければならないことがわかり、生徒にとって大変有意義な内容となった。今後も大学との連携を図り、この事業を充実させたい。

5. 高・高等学校連携

①ねらいの達成度

I. 海外研修の成果

国際コミュニケーション科の2年生によるオーストラリアへの海外研修では、異文化理解や英語によるコミュニケーション能力の向上を図ることができた。初めは、現地高校生やホストファミリーと英語で話すことに戸惑いや不安を感じているようであったが、日が経つにつれて積極性が増し、自らコミュニケーションを取ろうとする姿が見られるようになった。

また、オーストラリアならではの自然や文化にも触れ、生徒たちはひと回りもふた回りも大きく成長したと確信している。帰国後には、海外研修によって英語の学習に対する興

味・関心が高まったという声が多く、コミュニケーションや国際理解の大切さを肌で感じ取ることができたようである。さらに、

その後もセント・アイビス高校の生徒と英語でメール交換をしている生徒が何人かおり、これまで学習してきたことが実践的に活かされているようである。

II. TV 会議による交流の成果

研究3年目には、研修先のセント・アイビス高校とのTV会議システムを利用した交流を計画していたが、現地の事情により実現させることができなかった。しかし、オーストラリアの他の高校とのTV会議による交流を模索していたところ、研修管理課や県立長良高校のお陰で、TV会議による海外高校との交流が実現できた。

相手校であるコリンダ高校と英語で会話した生徒たちからは次のような感想を得た。

- ・やったことのないことが経験できて、とても良かった。
- ・今後再びできるなら、お互いにもっと英語をたくさん使った交流をしてみたい。
- ・遠くても、相手の顔や表情が見え、場の雰囲気がわかるので良い。
- ・コリンダ高校の生徒たちは予想以上に日本のことをよく知っていた。

TV会議による交流にもっと多くの時間を費やしたい、もっといろいろなことを英語でやりとりしたいという声も多くあり、これを機に、英語によるコミュニケーション能力の向上に励もうとする生徒が増えることが期待される。

6. 中・高等学校との連携

中学校に対して配布したPRポスターにより、中学生やその保護者、中学校の先生方に本校の教育内容、国際コミュニケーション科の特色などを理解してもらうことができたと考えている。今後、入学後のアンケートによりその効果を検証したい。

また、夏休みの英語サマーワークショップで多くの中学生たちと交流できたことは、本校のPRや情報交換の場としても大変意義深いものである。この効果についても、ワークショップ参加者が本校へ入学した後にアンケートを実施して検証したいと考えている。

岐阜大学の英語教育

—— 事例紹介 ——

岐阜大学教育学部英語教育講座

准教授 巽 徹

教育学部の英語教育講座の巽と申します。

きょうは岐阜大学の英語教育ということで話すはずですが、岐阜大学には昨年度からお世話になっておまして、岐阜大学の英語を全部語り尽くせる自信はございませんので、自分がやっている授業を紹介するというので、それが岐阜大学にふさわしいかどうか皆さんにお聞きしたいということでお願いできればというふうに思っています。

岐阜大学にお世話になる前、昨年度の前はイギリスの方におまして、うちの裏庭から見た景色がこの景色ということですが、岐阜とそう大して変わりはないかなあという感じはしますが、懐かしいなあと思っております。

自分がさせていたっている授業は、特にここに書かせていただいたとおり、アウトプットを重視しているというつもりで、アウトプット重視の英語の授業と。具体的には、「Group Work Reporting」という活動を学生の方にさせている授業ですが、それについて紹介させていたきたいと思っております。

まず、自分の理解が間違っているといけないので、岐阜大学の英語教育ということで、全学共通教育の英語はこういうのがありますと。これで合っているかどうかというのを確かめていたきたいのですが、1年生へ入ってきた学生が英語A1を前学期にとって、英語A2というが後学期にとっていると。そして、それぞれの科目はこんなようなねらいでやっているはずというふうに思っております。それから、英語Bという種類を選ぶチャンスもありまして、英語Bの方が2単位、こんなような中身で行われていると。私は英語A2というのを今は担当しております。それから、他に担当させていたっている科目は、このような科目です。教育学部で課している科目ですが、教育科目の開講科目、教養基礎の中に入っている外国語コミュニケーションという科目があります。それにIとIIというのがありますけれども、そのIIの方を担当しております。それから、英語コミュニケーションIとIIというがありまして、各2単位ですが、これは英語教育講座の専門科目であり、それから英語の免許を欲しいと、取りたいという学生の免許の教職の科目にもなっております。ですので、これから紹介する内容は、岐阜大学全体の英語ではなくて、ここの中のことだけで申し分けないのですが、そこでしかお話しできないですが、そういった範囲だということで聞いていただければと思います。

最初に、どうしてアウトプットなのかということですが、三つありまして、一つは、先ほどからお話しいただいている高校から上がってきた学生の今までの学習からということですね。二つは、アウトプットすると、中心にやると、こんなことがいいんじゃないかという、信じていることがあって、それが二つ目。それから、先ほども遠藤先生のお話の中にありましたが、文部科学省の方で最近言っておられる新学習指導要領の中でいわれているようなこと、この三つのことからアウトプットを重視したらどうかなあというふうに考えました。

一つ目は、1年生に入ってきた学生にいろいろ話を聞いたりアンケートをとったりしてみると、今までの学習はやっぱりこういったことが多かったと。読解が中心であったり、文法問題を解くということが多かったり、訳したり、リスニングの問題をこなすということが多かった。つまり、岐阜大学に入ってくる学生たちの今までの学習歴の中では、どちらかというとインプッ

トに重視されていたのかなということ、じゃあ足りない分、アウトプットの方を少し強調してあげると、ちょうどバランスよくなるのかなあということが一つ。

それから二つ目は、アウトプットをすると、きっとこんなことがあるじゃないかというふうを考えてみました。一つは、自分が言いたいということと、本当は言えることに差がありますね。言いたいけれど言えないというところで、じゃあ言いたいことが言えるようにするために何が必要だと。何が必要かなあというのに気がつく。それから、アウトプットするということは、聞いて分かる、読んで分かるよりも、きっとすごく負荷がかかるのです。その頑張っ、頑張りが切らないと、言えない、書けないというときに、何か今まであった力が「びよっ」とはみ出してしまうというか、今までの持っていた力以上に伸びてしまうということが起きないかなあ。それから、自分が使ってみると、あっ間違っているとか、自分が使ってみて初めて正しいのかどうかということが気付くのではないか。それから、先ほども言ったのですが、理解することと、自分で文を作ったり、言ったりという、何か違う力を使っているような気がする。アウトプットするわけですから、何回も何回も言わないと、あるいは練習しないといけないわけで、そうするうちに段々自動的に言葉が出てくるようなことが起きるのかなあということで二つ目は考えてみました。

三つ目は、先ほど遠藤先生からも、そのままですが、今までは文部科学省は、前の学習指導要領では、聞く、話す、音声重視と言われていたのですけれども、これからは四つの技能を総合的に育成することということをおちこちで強調しています。四つの技能というと、聞く、話す、書く、読むですけど、四つを箱の中にとにかく入っていればいいのだという、並べておいてということではなくて、それぞれが何かくっついていると、どこかで何か有機的に絡まっているようなことをやれというふうはどうやら言っているような理解をしております。ですので、四つ上手にきれいに並べているというよりも、四つが何か複雑にどこかで交わっているような機会を学習者に与えることで、何か少し英語の力が伸びるのかなという予感ですね、それでもってやってみました。ですから、アウトプットといっても、言っているとか、書いているとかだけやりゃいいのだという気持ちではなくて、自転車の中にあるタイヤのように、今まで育てていただいたインプットの部分をアウトプットするための、何か上手に絡めていくことに効果があるのかなあというふうに思っています。

実際やったことは、これからご紹介いたします。こういうことなのですが、グループで働いて、レポートをしようということですが、ちょっと小さいので見えにくいですけど、実際やったのはこんなことをやっています。3人組ぐらいのグループをつくって、グループの中で代表を決めました。こんな感じですね。それで、教師の方は、寒いですけど、教室の外、廊下において、廊下の外に1人だけグループから学生を呼び出して、英語で話を何か伝えます。ある話を伝えるのですが、その話を英語で聞いた学生は、部屋の中に戻って、残りのメンバーに、今聞いてきたことを英語で伝言するということです。短い話だったらすぐ伝わりますが、これが結構長い意地悪な話になるとなかなか難しいですね。ここで、フルパワーで頑張っていたと伝えられない。聞いている人は聞いていただろうとしていてもしようがないので、聞いている人は聞いた内容を英語できちんと書き取ってくださいと。これで完結すればいいですけど、ほとんど伝わらないですね。また後で紹介しますが、全然伝わらない。1人じゃ絶対無理なので、じゃあ2番目、次の人をもう一回言って同じように聞いてもらいたい。戻ってきたら、同じように伝言してください。リポートしてください。3番目も4番目も同じと。みんなでやるとそのうちストーリーが段々見えてきて、話ができてくると。4人で協力すると、英語で何となく話全体が作り上げられて、こんな話かというのがわかる。ここで終わってしまったでもいいですけど、ただここで終わってしまうとインプットの方が少し足りないですので、僕が使ったのは、実は英字新聞の記事ですけども、英字新聞の記事をネタにして話を作りました。そのもとの記事を学生たちに戻します。そうすると、4人で力を合わせても

まだ足りなかった部分があり、あるいはこんな表現を使っているのか、こんな言い方があるのかということで、自分の書いたあらすじをもう一回見直す時間をつくりました。

そうすると、最初から読めというよりも、随分表現や言葉の語順や、それから文法の使われ方とかにやや注意を向けてもうちょっと読み直すことができたようです。そして、粗筋を書き直して最後に提出というようなことをやってみました。

何でこんなことをやったかという理由は先ほどお話ししたとおりなのですけれども、とにかく四つあるいろいろな技能をばらばらに箱に詰めておくのではなくて、それを何かつなげて一遍に鍛えられないかなあと。ついでに中身だけじゃなくて、ストーリーがややおもしろいねということではなくて、英語の表現自体にも注意が向く。そうすると、英語の力が少しくつのではないかなあと。こんなような英字新聞の、これがネタですよ。三面記事みたいな感じなのですけれども、実際使った話はこんなような話です。

あるイギリスの中・高一貫校で、ランダムな麻薬の、最近大学でも話題ですけど、ドラッグテストをやったと、いきなり適当にランダムに。この学生さん、すごく真面目な子ですけれども、あんたはドラッグをやっていると。ポジティブな結果が出てしまって、先生もびっくりしましたけど、一応テストの結果は黒。結果だけ先に言うと、本当は彼女はやっていなくて、この歯磨き粉に入っている化学物質がちょっと検査結果にひっかかったらしいのですけれども、文部科学省は学生がドラッグをやっているの、まず唯がやっているか見つけて、その学生を助けよう。こんなような用具を使って、やった結果がポジティブ。でもテストは他の学生の目の前でやったものですから、彼女はかなり恥ずかしかった。親が呼ばれて、しかもよりによって使っていたドラッグがクリスタルメスといって、カナビスどころじゃない、すごくきついものだというふうに出てしまって、親は慌てて医者連れていったら、実は断然、白だということがわかったのですが、学校から無実のオフィシャルレターが来るまでに数週間かかり、その間はずうっとほかの学生から白い目で見られてかわいそうにという、みんなはそんないい加減なテストはやめろと言っているというようなお話ですけれども、そういったものが英語で伝わり、書くというような授業をしております。

実際、岐阜大学の学生は、こういう活動をやるとどんなふうになるかということですけど、まず話の内容はできるだけわかりやすい英語、優しい英語で、英字新聞のままの言葉じゃなくて、少し言い変えたような形ですみますので、廊下で寒い中聞いた学生は、大体こんな感じですね。レベル差はありますけど、ちょっとだけという学生もいますが、とりあえず何となく。その子たちがレポートを英語で伝えるときに、こんなタイプがいるわけですね。最初のうちは、「最後の笑顔」で勝負タイプがかなりいますが、段々根気強くやっていると、キーワードタイプ、それから内容重視タイプ、この辺が段々増えてきて、写メールタイプは大体空中分解している、全部やろう、何とかと思っても無理という感じですけどね。それで、学生の頭の中、心の中では、多分こういった心の動きというか、頭の働きになっていると思うのですけれども、そこに先ほどの元の記事を、それから友達がレポートしてくる話す言葉というのが、恐らく有効なインプットとして働くのかなあという気持ちです。実際に学生のレポートなんかを見ていただくと、最初はこのように、文字は見えないと思いますけど、何か羅列したものが書いてあったり、ずんぐりむっくりの絵が書いてあったり、とにかく何か形に全くならないものが、友達のレポートを聞いていくうちに段々形になり、そしてもと記事を読んで仕上げることで、一応まとまったストーリーが再生できると。そこで終わってしまうとまたおもしろくないので、そのまとまった内容について、最後の方ですけど、コメントとして、自分の意見が述べられるような形にまで段々育ってきたかなあと。そのコメントや自分の考えが書ける、ここをこの後はどんどん伸ばしていきたいなあというふうに思っています。

さっき元の新聞記事を渡したということですけど、ここでは幾つか注目していたのは、何を注目しているのかなあ、学生は何に目を付けているのかなあ、書いた紙をいろいろ見てみると、

まだ途中ですけど、三つぐらい今のところ学生の目が向いているのはこんなところかなあというふうに思いました。最初に力を合わせてつくったもの、そして読んでもう一回書き直したものを比べると、まず自分の書いたものは違うと直しているタイプ。それから最初に書いた表現よりも、もうちょっといい表現というが分かって使っている。例えば、最初に唯ちゃんが何処どこへ行きましたと。すごく急いで行ったのですけれども、She went to 何処どこと書いてあるのが、読んだ元の記事を見ると、山の上からもう大急ぎで降りましたと、She scramble down 何とかという表現に変わっていたり、この言い方がいいなあというのをぽってり持ってきたり、あるいは話の中で抜けていた情報を足していると、このようなことが起きているようです。この辺はもう少し詳しく調べているところです。

それで、そんなのが段々できてきたら、今度は「Group Work Reporting」の「ADVANCED」というのをチャレンジさせます。自分がいつも情報の発信者となる。発信者となるには、学生がいっぱい英字新聞を読んで、その中でおもしろいネタを探さなくちゃいけない。相当いっぱい読まないとおもしろいネタに出会わないですけど、その話を要約して、そして練習を一生懸命積み重ねて、僕がやっていた役を今度は学生がやるということですね。すらすら行ければいいのですが、まだそこまでは行っておりませんが、こんな感じでやって、他の学生から聞いてまたレポートしているということですね。これが、今の学生は、自分で読んでまとめたものを読みながら伝えていましたけれども、この紙がいずれ「ひゅっ」となくなって、絵を見ながらプレゼンテーションになるようになっていけばいいなあということですね。

それで、「Group Work Reporting」をやっていると、学生の気持ちとしてはこんな感じ。すっきり感がどれだけすっきりしているか分からないですが、一応取り組んでくれた学生たちの声を上げてみると、こんなようなことを言っております。

アウトプットしろと言っても、ゼロからやれと言っていないので、2番目に書いたように、一から自分の言葉にするのではないので負担は軽いのだけれども、でもやっぱり自分の持っている力を総動員しないと相手になかなか伝わらない。その総動員するとき、何か力が伸びたりするのかなあ。

最初の方のように、活動の間に頭の中が英語でいっぱいになってくれれば本当に英語の教師としてはうれしいなあというふうに思うわけですけども、こういったことを積み重ねると、恐らく英語の力が段々染み込むような形についてくるのではないかなあというような気がしております。以上でございます。(拍手)

岐阜大学の英語教育－事例紹介－

平成20年度 第2回
岐阜大学教養教育推進センター FD研究会
「岐阜大学の英語教育－事例紹介－」

アウトプット重視の英語授業

-大学におけるGroup Work Reportingの実践-



岐阜大学教育学部
異 徹

岐阜大学の英語教育

全学共通教育

科目	単位数	概要
英語A1 (必修)	2	語彙力と構文力を身につけ、専門課程での勉学に資する基盤的な英語力を養成する
英語A2 (必修)	2	同上
英語B(選択必修)	2	多様な学習内容からなり、受講者が自分自身の意欲や希望に応じて選択する

他に担当している英語科目

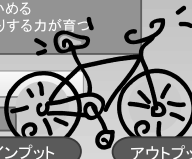
科目	単位数	概要
外国語コミュニケーションⅡ (英語)	1	教育学部開講科目「教養基礎」。2単位選択必修のうちの1単位。
英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ	各2	英語教育講座専門科目。教職免許取得のための教科に関する科目

なぜアウトプット重視か？

1. 学習者のこれまでの学習歴から
 - ・読解
 - ・翻訳
 - ・文法問題
 - ・リスニング

インプット重視の英語授業
2. アウトプットにより期待される効果から
 - ・表現したいこと、表現できることのギャップに気づく
 - ・アウトプットを生み出そうとして英語力が引き伸ばされる
 - ・自分の持っている英語規則が正しいか確かめる
 - ・理解する力に加えて文を作ったり表現したりする力が育つ
 - ・たくさん使ってすらすら自動化
3. 新学習指導要領から
 - ・四つの技能を総合的に育成すること

インプット アウトプット



What I did

Group Work Reporting



Group Work Reporting

- ① 3人から5人組のグループを作る。
- ② 各グループから代表を一人ずつ出して、教室の外に話を聞きに行く。
- ③ 部屋に戻り、話の内容を英語でグループメンバーに伝える。
- ④ 残りのメンバーは、それを聞いてメモを取り、ストーリーを書いて再現する。
- ⑤ 二番目のレポーターが各グループより教室外に出て、話を聞く。
- ⑥ その後の流れは同じ。
- ⑦ 最終レポーターのレポート後に英語の要約まとめる。
- ⑧ 英字新聞の基記事を各自の書いた要約文を見直す。内容について感想や意見などを英語で付け加えて提出する。



Why I did it

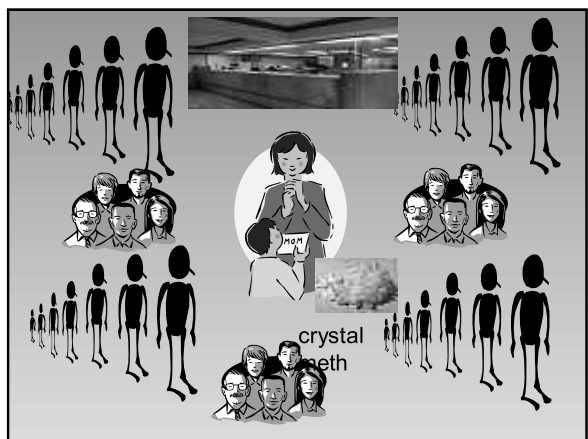
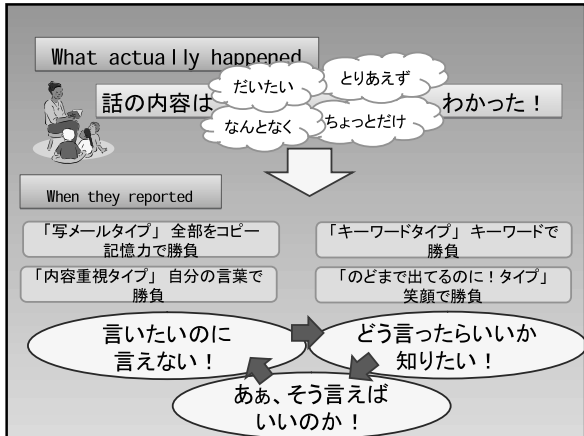
話す 書く

聞く 読む

4技能をいっぺんに鍛えたい！

もっと欲張って！

文の構造や言葉の使い方にも注意をむけてくれないかな？



Several Weeks

innocent

Department for Education and Skills

What actually happened

話の内容は だいたい なんとか ちゃんとだけ とりあえず わかった!

When they reported

「写メールタイプ」全部をコピー 記憶力で勝負

「キーワードタイプ」キーワードで勝負

「内容重視タイプ」自分の言葉で勝負

「のどまで出てるのに！タイプ」笑顔で勝負

言いたいのに 言えない！

どう言ったらいいか 知りたい！

ああ、そう言えば いいのか！

What are the differences?

Summarising Story Retelling Dictogloss

アウトプットの活動 内容 表現

英語でアウトプットする動機

- 英語で要約を書かなくちゃ！
- 要約を提出しなくちゃ！
- Group Membersに伝えなくちゃ！

Group work Reporting

学生のメモと summary & comment

Group Work Reporting

- 学生が情報発信者となる
- 英字新聞から記事を見繕う
- 記事を要約する
- 練習を重ね、英語で語って聞かせる

Group Work Reporting

「こんなことが言いたい…のに言えない！」モヤッと感

「こんなふうに言えればいいんだ！」スッキリ感

学習者の声

- ・とても面白い取り組みだった。英語を聞き理解したことを他の相手に伝えるという作業は言語学習にとっても有効だと思う。
- ・取り上げられた記事も面白かったし、とても好きです。聞いたことを話すので一から自分の言葉にするのではないので負担は軽くなるけど、自分の言葉でも補わなければ伝わらないので、アウトプットの力がつくのですごく有効な活動だと思います。

学習者の声 つづき

- ・この活動で、英語を聞くこと、英語を話すこと、また、書くことと、耳、口、手、目で英語を感じ取ることができ、活動の間は頭の中が英語でいっぱいでした。自発的に英語を使おうとすることができ、そういった環境はなかなかないので英語の学習にも役立つと思います。
- ・自分の得た情報を即座に英語にすることは難しいけど、回を重ねるごとに自分なりにやさしい単語に置き換えたり、簡素化して短文で伝えるように自然となっていました。説明をしたり自分の言いたいことを英語で伝える練習にもなり、英語力は上がるだろうなと思いました。



ありがとうございました

教養教育推進センター

副センター長挨拶

中川 一雄



FDを終えたばかりの今、今日の議論を包括的に纏めることはできないと思うのですが、司会者として幾つかポイントを指摘したいと思っています。今日は、高等学校での学習の実情と大学での教育の一つの事例ということで、今日の資料の最初の方にありますように、グランド・プランはどうあるべきかとか、英語教育のカリキュラムはどうあるべきかとか、それを担保する組織はどうあるべきかなどという、「そもそも論」までは立ち入らなかったのですが、ただ結果的には、私や伊藤 徳一郎先生が考えていたように、事例や実情を報告する中で、案外本質的なことが皆様伝わっていったのではないかと思います。そういう意味では、本来的な Faculty Development という、教育能力を少しでも高める授業の改善につなげるということが、幾つかの点で参加された先生方の心に残ったのではないかと思います。

その幾つかのポイントについて言えば、高校の場合ですと、例えば県立岐阜商業高等学校の場合がいい例だったと思うのですが、はっきりとした学習目標を掲げて、そして、それに対して十分な時間を当てる必要があること。県立岐阜商業高等学校の場合ですと、週30時間程度の中の3分の1弱を英語の授業に当てている実情が報告されました。つまり、学習量をしっかり確保することが最も大切な事の一つだということが分かりました。また、学習課程全体のなかに英語学習のプログラムを位置付け、組み込むことの必要性も理解できたと思います。4－6年一貫の各学部カリキュラムのなかでどのような英語力が必要なのか、そして、それを担保するカリキュラムや組織はどうあるべきか、TOEICなどの得点目標を学習の中心に位置付けることの是非など、今後の議論に必要な課題も明確になってまいりました。

巽先生の報告からは、学生達はやはり何か作業すること、あるいは積極的に、授業の中で受け身的だけではなくて、能動的に参加し活動することに学習する喜びを感じるものだということが教示されました。これは、学習意欲を喚起するためには随分大切なことだと思われまます。以上のようなポイントが、今後岐阜大学においても具体化されるグランド・プラン創りに反映される形で、早急に各部局等でも議論や検討が迫られると思います。そこに今回のFDが生かされればと願っています。

教養教育推進センター長挨拶

岐阜大学副学長 古田 善伯（数学・附属学校担当理事）

長時間に渡り、講演、意見交換等、ありがとうございました。

講師の先生方には、各高等学校の英語教育の現状、取り組み等、大変貴重なお話を賜り誠にありがとうございました。

本学学生の英語力は他大学に比べ低いのではないかとということもあり、本学の英語教育につきまして、大学教育委員会の下に設置いたしました「学士課程教育の構築に関する検討ワーキンググループ」において、今後、大学として学生の英語力をどう高めていくかというところの取り組み、大学全体としてどう進めて行くべきか、検討を進めております。

大学教育、1年生から4（6）年生の教養・専門教育を通した一貫教育の中で、学部として学生に身に付けさせたい英語力について、各学部の担当の先生方を中心に十分に話し合っていただけ、全学で取り組み、岐阜大学の英語教育体制の整備を図って行きたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

本日は、大変ご苦勞様でございました。



「平成20年度第2回教養教育推進センターF D研究会アンケート調査票」の参加者感想等

No	1. F D研究会全体の内容等	2. 講演「高等学校の英語教育」	3. 「岐阜大学の英語教育－事例紹介－」	4. その他、教養教育（全学共通教育）全般に関し、要望・意見等
1	TOEICのスコアを数値目標とすることは、大学教育とは全く無縁であることがよくわかった。TOEICなど、専門学校にでもやらせればよい。大学で行うべき教育では、英語の楽しさ（文法等を含め）を教授することが重要である。一般的に「数値目標」が事の重要性をないがしろにするものであることがよく分かった。	大学入試がいかに高等教育をダメにしているかわかった。5（東大）50（名大）・・・というのは、県教委の意向を先取りして出てきたものだろうか。2級取得を全生徒に要求する。容易に取得できない場合は、「取得」するための「技術取得」が目的化することになる。大学教育とは全く異なるものである。（やはり専門学校か）		「大学の学問を教育すべきではないか」という北高の先生の言葉を頭の片方に置いておくのではなく、きちんと中心にすべきである。TOEICから一度離れて、真の語学教育を開かれた場で議論すべきである。県教委の話でわかったように資格（TOEICスコア）は、大学を専門学校に変質させる道具となる。大学の関連委員会が推進することがあってはならない。
2	英語教育では「英語が好き」であることが、一番重要かもしれないと認識した。	高校で教えられている英語の具体的内容がよくわからなかった。岐阜北の先生は、目に見える成果としてテストを多用しているとの話であったが、もう1人の先生は単なる高校の紹介で、英語教育については具体性がなく参考にならなかった。		
3	今後、各教科についての研究会が必要と感じた。	岐阜北高校における英語教育について、わかりやすく説明していただいた。ゆとり世代になってからの教育内容の変化についてもまた別の機会にお話しただきたい。華陽フロンティア高校の先生の話についても英語教育重視の方針がよくわかった。国際コミュニケーション科の設置理由については、他校との競争のためだろうか。	工学部化学系では論文を読むための英語が中心となるので、コース分けも必要かと感じた。	
4	非常に興味のある内容だったが、岐阜大学としてどう考え、どう具体的に生かすかについてまだまだ多くの議論が必要だと感じた。	大学入試が高校での英語教育を大きくゆがめていると感じた。2次試験に英語を入れない方がよいのではないかと（岐阜大学だけという意味でなく、全国の大学でそのようにする）。		「tool」としての英語を教育する場ではないと思う。言語を通じて異文化を学ぶ場とすべき。その意味では、言語という枠をはずして、異文化教育（アジア、アフリカ、南米、イスラム文化なども含む）として、構成する考え方もありうるのではないかと？
5	大変示唆に富む内容であった。ただし、この内容がどれ程大学執行部に理解されるか甚だ疑問である。執行部は、このF Dの内容をよく理解すべきであろう。なお、今後F Dは年に1回でよいかと思う。	（遠藤先生）大変興味深い内容だった。現場での苦勞がよく伝わった。テストにつける事によって、英語がらいを増やしているというのは何とお話にもあった浅薄な成果主義であろう。長期的視点のない成果主義は後々に災いをのこすことになる。ノーベル賞学者の方に関連した柿の取組の話がされたが、誠に適切な例であったと思う。大学の英語教育もこのような視点から見直すべきである。語学とは本来、楽しむものだからである。（原先生）英語以外の内容が多すぎ、県教委の自慢話ばかりで高校での英語教育が実際どうであったのかよく分からなかった。	大学での英語教育の一環として、どの様なものが行なわれているのかが分かり、参考になった。	
6	問題点がかなり分かりました。	受験と文科省の方針が一致すると良いと思います。TOEICの数値目標には少し驚きました。テストが多いですね。	面白かったです。共通の話題提供が大切ですね。	現在でも多くの教材を提供されていますので、さらにアピールを行って下さい。

No	1. F D研究会全体の内容等	2. 講演「高等学校の英語教育」	3. 「岐阜大学の英語教育－事例紹介－」	4. その他、教養教育（全学共通教育）全般に関し、要望・意見等
7	高校の英語教育の内容が理解できて良かった。	進学校と商業高校では、英語教育に内容の差が大きいのには驚いた。これは対照者の違いによるものでしょう。 『大学入試の罪』難関大学をめざした受験勉強による膨大な若いエネルギーの浪費。「正しい」勉強に向けたらどれだけの利益になるか考えなければならぬ。これは英語に限ったことではない。	英語教育は、日本語の国語を習得させるのと何ら変わらないことがわかった。 非常に参考になった。ノウハウを学内で広く共有したい。	
8		受験のための学習と人としての学習のズレはあるのかと感じた。		
9		1. 内容は、だいたい想像していた通りでした。 2. 模定試験が生徒・高校の目標となっているのがわかりました。このやり方はどうなのかが個人としてはよくわかりません。一つの方法だとは思いますが、いくつもの報告を聞いたが、深く理解することは難しかったです。	おもしろい、新しい試みだと思えます。多くの中の一つの試みだと思えます。	
10	難しい問題なので、事例をいくつか見ることができたのが少し役に立つかも知れない。		学生が英語で表現する場面をうまく作り出していると思った。	
11	英語教育を考えるF Dの第1歩として、今回は具体的な事例に絞ったということでも入りやすく、またわかりやすく、よい構成だったと思います（今後にどうつなげるかは、課題となりますが）。	進学校と商業高校という、特徴の異なる2校のお話の差異や類似性は興味深かったです。よい人選であったと思います。入試（北高）・資格（県・岐商）に選ばれた英語教育は、岐大の場合とは違う苦労があるとうわかりました。	大変面白く、自分の授業の参考にもなりました。	個人的に授業例紹介が、勉強になり好きです。ここ数回のF Dは高大連携についてですが、機会がありましたら2年ほど前のF Dでやったような、評価の高い全学共通科目担当者、自分の授業を紹介するF Dをまたやっていただけたら嬉しいです。
12				

平成20年度第2回教養教育推進センターFD研究会 アンケート調査票

本日は、何かとお忙しい折りご参加いただき、厚くお礼申し上げます。

ついては、今後の教養教育推進センターのFD活動に役立てる意味を含めまして、感想等を差し支えない程度にお聞かせ願いたいと存じますので、よろしくお願ひします。

研究会終了後に回収させていただきますので、よろしくお願ひします。

【提出できなかった方は、12月10日（水）までに全学共通教育事務室へ送付願ひします。】

1. 今回ご参加いただきましたFD研究会全体の内容等について、どのように感じましたか。感想等をご自由にお書きください。（枠内に書ききれない場合は、裏面へご記入ください。）

2. 【講演】『高等学校の英語教育』に関し、感想等をご自由にお書きください。（枠内に書ききれない場合は、裏面へご記入ください。）

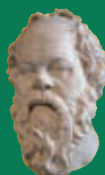
3. 【講演】『岐阜大学の英語教育－事例紹介－』に関し、感想等をご自由にお書きください。（枠内に書ききれない場合は、裏面へご記入ください。）

4. その他、教養教育（全学共通教育）全般に関し、要望・意見等をご自由にお書きください。（枠内に書ききれない場合は、裏面へご記入ください。）



表紙 ソクラテス

紀元前5世紀、ギリシャに生まれたソクラテスは「人が人として生きる意味」を史上初めて自覚的・意識的・方法的に問うた「哲学の祖」として知られる人です。実を言うと、本格的な「学問」というのはこのソクラテスの問いから生じていったのであり、それは「人が生きていることの意味」を問うことからさらに「人がここに生きている世界」への問いとなっていったからです。私たち人間は「この世界に生きている」からです。私たちが、何が対象であれ「疑問を持ち、追求し、学ぶ」というのも本来はそうした意味がありました。「学ぶ」ということはただ単に私たちの衣食住の欲望を満たすための手段を探すためだけではありませんでした。ところが近代以降の科学はそうした「欲望の充足のための手段」とされていく傾向が強まりました。これはこれで人間の生物的な欲求を満たすものとして意味はありますけれど、人間はそれだけで生きているわけではないはずです。私たちが生きているのにどんな意味があるのかを問うことは、「人が人らしく生きる」ために必然的なことだと言えます。「本当の学問」を取り戻したいです。



岐阜大学教養教育推進センター広報誌「ディアロゴス」第15号

発行

岐阜大学教養教育推進センター

編集

教養教育広報・FD 専門委員会

〒501-1193 岐阜市柳戸1番1

TEL. 058-293-2178 FAX 058-293-3020